

# 戦後青森県の県会議員選挙と歴代議長 ④

—地方政治の“名望家たち”—

藤 本 一 美

## 序 文

一般に、「名望家」といえば、特定の地域社会で影響力を備えている人々のことを指し、かつては、名士、徳望家、素封家、および旧家などと呼ばれていた。その活動は、政治、経済、および文化など多方面にわたっており、そのため、厳密に定義することは難しい。ただ、彼等に共通している要素は、村役人、区長、および戸長(こちょう)などの政治上の公職・名誉職を兼務し、一定の行政能力と地域社会をまとめる才覚を持っていること、また十分な経済力を有し地域産業の発展に寄与する一方で、常に地域社会への慈恵的行為を怠らないこと、さらに高い教養を身につけ地域文化の担い手になっている点などを挙げることができる(「横浜の地方名望家—横浜開港資料館」[www.kaikou.city.yokohama.jp/journal/106/02.html](http://www.kaikou.city.yokohama.jp/journal/106/02.html))。

そこで本稿では、「名望家」とは、さし当り財産と教養を有し、得定の地域社会内で声望を得ている人々のことをいい、その声望の権威により服従を求めることができる、と定義しておきたい。戦前までは、地主や地方産業家などが名望家を中心とする政党を組織し、それは「名望家政党」と称されていた(五十嵐暁郎「名望家」『社会学事典』[弘文堂, 1988年], 864頁)。

今日でも、県会議員(以下、単に県議と略す)のほとんどが、いわゆる

「名望家」によって占められている。実際、県議は教養と財産を有し、市町村長や市町村会議員の出身者が少なくなく、地域社会で重要な政治的、経済的、および文化的役割を担っている。

それでは、本稿で論議の対象にしている県議とは如何なる存在であるのか？ 彼らは県民を代表して4年ごとに選挙で選ばれ、県の予算や業務について審議し、県政の方針を決定する。そのため、大きな権限が与えられている。その主なものを挙げれば、次の通りである。

1. 議決（①条例の制定・改正・廃止，②予算の決定，③法律や条令で定められた重要事項の決定）。
2. 認定・決算の審査。
3. 調査・検査・監査請求，県業務の監視。
4. 請願・陳情受理。
5. 意見書の提出。
6. 選挙（議長，選挙管理委員などの選出）。
7. 同意（副知事，行政委員の選任・任命に同意）。

県議には、学歴も経歴も不問であり、県会議員選挙（以下、県議選と略す）への立候補の条件さえ満たせば、誰でも出馬できる。立候補の条件は三つある。すなわち、①満25歳以上の日本国民であること、②その都道府県の選挙権を有していること、③供託金60万円を提出できること。供託金とは、出馬時に預けるお金のことで、一定の得票数を得ていれば選挙後に戻される。なお、県議の兼業は基本的に禁止されている。

今日でも、県議は地方におけるいわゆる「名望家」的存在である、とあってよい。上で述べたように、名望家とは、特定の地域社会において名声や人望を兼ね備えた人々のことを指し、実際、県議は県レベルで政治的に重要な位置を占めており、社会的に大きな威信を有している。県議は議会において、県内で生じたあらゆる政治的問題を取り上げ、県執行部を質

し、県民生活の向上に努める。県議の任期は4年間で再選は何回でも可能だ。与党議員の場合には、4回ないし5回連続して当選すれば、議長に就任する。ちなみに、青森県の現議長は、自民党所属で当選4回の熊谷雄一・県議である。

県議の生活は、大きく議会の会期中（＝開会中）と会期外（＝閉会中）とに分けられる。また4年に一度の県議選の際は、選挙運動中心の生活となる。1年間に開会される県議会の日数は、365日のうちの約三分の一以下であり、県議の職場である議会は、定例会、臨時会を含めて年間平均5、6回程度招集され、その平均会期日数は約98日に過ぎない。

県議会は、午前と午後、1日に二度開会した場合、開会時間は、通常、午前は10時～11時、また午後は1時に開かれ、午後5時には終了する。議会に提出されている議案にもよるものの、県議一人当たりの議会での質問―質疑時間は、平均すると1時間程度である。県議はまた、議会において、自身が所属している常設の「委員会」、そのつど設けられる「特別委員会」、さらに所属する会派の「議員総会」にも出席しなければならない。

県議会の年間スケジュール表だけ拝見すると、「県議はかなりヒマな業務」だと見えないわけでもない。だが、実際には、県議は限られた質疑時間内に質問や発言を行い、県議会として適切な議決をする。そのため、議会開会の準備に備えて、多くの時間と労力をつぎ込んでいるのが現実で、閉会中も議会の再開に備えて、調査や準備を怠らない。

このように、県議は議会で取り上げる県の各種の計画や活動、自らの政策などについて、会期中外を問わず、県職員から話を聞き、専門家からレクチャーを受けたりなどして調査・研究に専念しているのが普通で、また会派が主催する会議にも出席する。

県議の場合、同じ地方議員である市町村会議員とは異なり、県全体という極めて広い地域を扱うため、勢い調査範囲が広くかつ問題も複雑化する傾向にある。そのため、市町村議員と比べると、調査・研究に長い時間を

かける傾向にある。

県議となる者には、市長選での敗退者や市町村会議員出身者が見られる一方で、逆に、県議の経験を積んだ上で、市長に鞍替えするケースもある。もちろん、県議としての実績を踏まえて、衆議院議員、参議院議員、および知事に立候補することも可能だ。

2018年現在、青森県の場合、選挙区は16で定数が48名であって、保守系議員が圧倒的多数を占めている。議員の報酬は、月額78万円（議長91万円・副議長81万円）で、この他に期末手当が年間で3.1ヵ月分、また政務調査費が月31万円支給されている。現在の県議会の会派別議員は、図表①の通りで、自民党が定数の過半数を優に超え、正副議長や委員会の正副委員長職も独占している。

戦後最初の青森県議選は、1947年4月30日に行われた。それまでは、戦前の1942年に選出された県議が戦争中だという特殊な事情もあって、任期を延長して、そのまま居座っていた。しかし、敗戦を契機に、新しい地方

<図表①> 青森県議会の会派別議員：定数48

会派名	議員数	所属議員の党派別内訳
自由民主党	31名	自由民主党31名
青和会	4	無所属4名
国民民主党	3	国民民主党3名
公明・健政会	3	公明党2名、無所属（公明党）1名
日本共産党	3	日本共産党3名
無所属	2	無所属2名
欠員	2	欠員2名

\*2018年時点での数字。

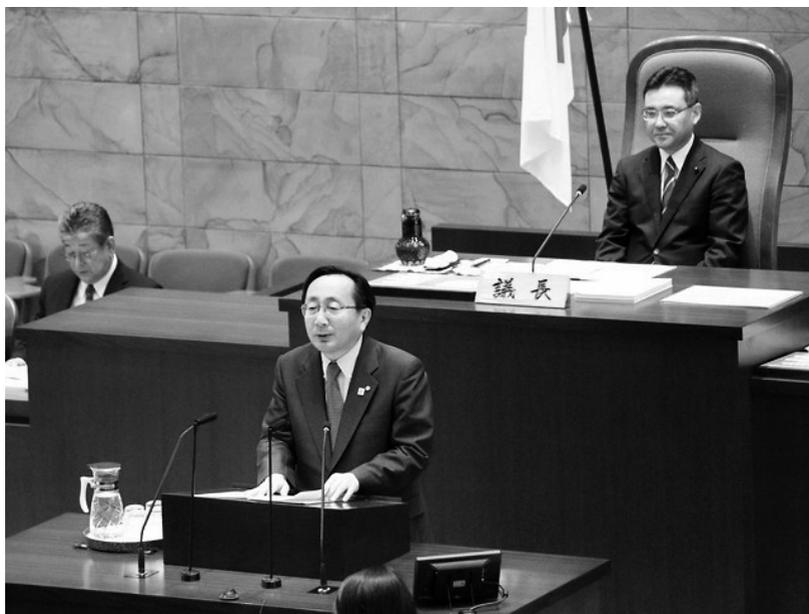
\*党派別内訳は前回選挙時の公認・推薦状況に基づくもの。

\*所属議員5名以上の会派は交渉団体として、代表質問権および議会運営委員選出権が認められている。

出典：『青森県選挙管理委員会』

自治法が制定され、県議選が行われる運びとなった。

本稿では、地方政治の名望家的存在である県議を分析の対象にしている。具体的には、第一部において、戦後青森県の都合18回にわたる県議選の概要と課題を検討する。その上で、第二部では、歴代正副議長の経歴（プロフィール）、県議選での得票数、および横顔を紹介する。これらの作業により、戦後青森県の政治を研究する際の、参考書＝資料として利用できれば幸いである。なお、巻末には参考資料として、戦後県議選の投票率、県議選での党派別当選者数、無投票当選者数、定数および選挙区の改定、並びに正副議長のデータなどを付記しておいた。記述にあたり、十分に調べたつもりであるが、もし間違いがあれば、ご指摘をいただき、訂正してより良い内容にしていきたい。



(2018年7月、県議会定例会での三村申吾知事の議案提案理由説明)

<総目次>

序文

第一部 県会議員選挙—概要と課題

- 第1章 1947年の県会議員選挙
  - 第2章 1951年の県会議員選挙
  - 第3章 1955年の県会議員選挙
  - 第4章 1959年の県会議員選挙
  - 第5章 1963年の県会議員選挙
  - 第6章 1967年の県会議員選挙
  - 第7章 1971年の県会議員選挙
  - 第8章 1975年の県会議員選挙
  - 第9章 1979年の県会議員選挙
  - 第10章 1983年の県会議員選挙 (以上『専修法学論集』第134号, 2018年11月)
  - 第11章 1987年の県会議員選挙
  - 第12章 1991年の県会議員選挙
  - 第13章 1995年の県会議員選挙
  - 第14章 1999年の県会議員選挙
  - 第15章 2003年の県会議員選挙
  - 第16章 2007年の県会議員選挙
  - 第17章 2011年の県会議員選挙
  - 第18章 2015年の県会議員選挙
  - 第19章 県会議員補欠選挙
- 結び (以上『社会科学年報』第53号, 2019年2月)

第二部 歴代正副議長—経歴・得票数・横顔

- 第1章 議長：櫻田清芽，副議長：中野吉太郎
- 第2章 議長：中島清助，副議長：中村清次郎
- 第3章 議長：大島勇太郎，副議長：阿部敏雄
- 第4章 議長：田澤吉郎，副議長：白鳥大八
- 第5章 議長：菅原光泊，副議長：外川鶴松
- 第6章 議長：小倉豊，副議長：中村拓道
- 第7章 議長：三浦道雄，副議長：藤田重雄
- 第8章 議長：三村泰右，副議長：米沢鉄五郎
- 第9章 議長：毛内豊吉
- 第10章 議長：白鳥大八，副議長：秋山皐二郎
- 第11章 議長：古瀬兵次，副議長：茨島豊蔵
- 第12章 議長：寺下岩蔵，副議長：秋田正
- 第13章 議長：小坂甚義，副議長：岡山久吉

- 第14章 議長：小野清七，副議長：工藤重行  
 第15章 議長：中村富士夫，副議長：松尾官平  
 第16章 議長：山田寅三，副議長：福沢芳穂  
 第17章 議長：藤田重雄，副議長：成田芳造  
 第18章 議長：秋田正，副議長：滝沢章次  
 第19章 議長：菊池利一郎，副議長：佐藤寿  
 第20章 議長：脇川利勝，副議長：神四平

(以上『専修法学論集』第135号，2019年3月)

- 第21章 議長：吉田博彦，副議長：中里信男  
 第22章 議長：石田清治，副議長：毛内喜代秋  
 第23章 議長：今井盛男，副議長：野沢剛  
 第24章 議長：原田一實，副議長：森内勇  
 第25章 議長：工藤省三，副議長：山内和夫  
 第26章 議長：鳴海広道，副議長：芳賀富弘  
 第27章 議長：小原文平，副議長：沢田啓  
 第28章 議長：佐藤寿，副議長：清藤六郎  
 第29章 議長：高橋長次郎，副議長：丸井彪  
 第30章 議長：高橋弘一，副議長：長峰一造  
 第31章 議長：毛内喜代秋，副議長：中村寿文  
 第32章 議長：太田定昭，副議長：間山隆彦  
 第33章 議長：秋田柁則，副議長：平井保光  
 第34章 議長：富田重次郎，副議長：神山久志  
 第35章 副議長：小比類卷雅明  
 第36章 議長：上野正蔵，副議長：小比類卷雅明  
 第37章 議長：山内和夫，副議長：西谷洸  
 第38章 議長：成田一憲，副議長：滝沢求  
 第39章 議長：神山久志，副議長：大見光男  
 第40章 議長：田中順造，副議長：清水悦郎  
 第41章 議長：長尾忠行，副議長：中谷純逸  
 第42章 議長：高樋憲，副議長：相川正光  
 第43章 議長：西谷洸，副議長：森内之保留  
 第44章 議長：阿部広悦，副議長：越前陽悦  
 第45章 議長：清水悦郎，副議長：工藤兼光  
 第46章 議長：熊谷雄一，副議長：山谷清文  
 結び

(以上『専修法学論集』第136号，2019年7月)

<参考資料>

- ①戦後青森県議会議員選挙の投票率
  - ②戦後県議選の党派別当選者
  - ③戦後県議選の無投票当選者
  - ④戦後青森県の県議会定数，選挙区の変更
  - ⑤戦後青森県の正副議長のデータ  
(就任年齢・当選回数・党派・平均得票数・選挙区・学歴)
  - ⑥戦後の県議会議員経験者で衆参議員・市町長当選者
- あとがき

## 第二部 歴代正副議長—経歴・得票数・横顔



(第81代議長 熊谷雄一：2017年3月22日就任)

### 第21章 議長：吉田博彦，副議長：中里信男（1983年5月10日，就任）

<目次>

1. はじめに
2. 吉田博彦
3. 中里信男
4. おわりに

## 1. はじめに

1983年4月10日に行われた県議選では、自民党は32人の当選に終わった。だが、無所属から当選者5人を引き抜き、37議席とした。一方、社会党は7人、共産党は2人、公明党は2人、民社党は1人、および無所属は8人当選した。

今回の選挙では、新旧交代の荒波に襲われ、現職議員が新人に追撃されて多数落選を喫した。実際、自民党は、元副議長の佐藤寿、県連総務会長の木村章一、および副幹事長の山内和夫らが落選している。その結果、新人15人が誕生した（藤本一美『戦後青森県政治史 1945年～2015年』〔志學社、2016年〕、252～253頁）。

5月10日から3日の日程で第73回臨時会—「組織会」を招集、その冒頭の10日、新議長に、自民党で上北郡選出の当選5回の吉田博彦（60歳）が、また副議長には、同じく自民党で八戸市選出の当選4回の中里信男（55歳）が選ばれた。ただ、自民党内の「選挙委員会」がもめたため、正副議長の任期についてはふれないままの“見切り発車”となった（「県議会」『東奥年鑑 1984年版』〔東奥日報社、1983年〕、180頁、「正副議長人事の舞台裏—たらい回し許さぬ」『デーリー東北』1983年5月11日）。

## 2. 吉田博彦

### ① 経歴

吉田博彦は1922年7月31日、東京で生まれた。東京農大を中退し、産業能率大学を卒業した。六戸村議を経て、1955年、六戸町長に当選、連続3期務めた。1967年、県議に転身して当選、これを連続5期務め、1983年、議長に就任している。北村正哉元知事とは従弟同士だ。吉田は、自民党県連政調副会長など歴任し、1977年、藍綬褒章を受章。また同年、全国議議会より、自治功労者として表彰された。1995年9月15日に死去、享年73であった（『青森県人名大事典』〔東奥日報社、1969年〕、845頁、『青森県議会史

自昭和50年～至昭和53年』〔青森県議会，1989年〕，1451頁）。

## ② 県議選での得票

・1967年4月の県議選	11,697票（第一位）	自民党
・1971年4月の県議選	9,686票（第三位）	々
・1975年4月の県議選	10,417票（第三位）	々
・1979年4月の県議選	13,733票（第二位）	々
・1983年4月の県議選	11,000票（第三位）	々
（平均得票数）	11,307票	

## ③ 横顔

吉田博彦は元々、六戸町の旧家の出身で、父親の仕事関係により東京、大阪暮らしが長かった。戦後、単身六戸町に戻り、1951年、六戸村議に当選した。以後、六戸村長選、六戸町長選、県議選と選挙では負けを知らない。吉田は県議会内では「農林族」として活躍し、働くことが趣味だというが、ゴルフが大好きで「ゴルフ歴は県内で一番古いほう」だと自負する。六戸町長時代に、通信教育で産業能率大を卒業した勉強家でもある（「この人」『東奥日報』1983年5月11日、「きょうの顔」『陸奥新報』1983年5月11日、「ひと」『デーリー東北』1983年5月11日）。

## 3. 中里信男

### ① 経歴

中里信男は1928年7月10日、岩手県に生まれた。盛岡工業学校卒、秋田鉱山専門学校を中退した。1957年、東北建機工業株式会社取締役就任。1964年、八戸鉄工協同組合理事長、八戸鉄工連合会会長などを歴任した。1967年、八戸市議に当選。1971年、県議に転出して当選、4期務めた。この間、1983年、副議長に就任している。中里は1989年から2001年まで、八

戸市長を3期務め、自民党県連政調副会長など歴任した。通産大臣賞、発明功労賞、特許庁長官賞を受賞している。2013年7月15日に死去、享年86であった(『青森県議会史 自昭和50年～至昭和53年』〔青森県議会, 1989年〕, 1446頁, 『青森県人名事典』〔東奥日報社, 2002年〕, 975頁)。

## ② 県議選での得票

・1971年4月の県議選	9,464票 (第五位)	自民党
・1975年4月の県議選	10,579票 (第四位)	々
・1979年4月の県議選	13,030票 (第一位)	々
・1983年4月の県議選	15,551票 (第二位)	々
(平均得票数)	12,156票	

## ③ 横顔

中里信男は、岩手県出身である。盛岡工業学校卒、秋田鉱山専門学校を中退した。八戸市議1期を経て、県議に4期当選し、副議長に就任した。その後、八戸市長を3期務めた。鉄鋼業出身だけに「鉄のように固い人」との評がある。中里は「中小企業の立場に立って政策に反映させるのが私の政治家としての役割」と言い切る。趣味は、山歩き、狩猟、クレー射撃。『中小企業経営の手引きー健全企業の在り方をめぐって』〔1982年〕などの著作もある。好きな言葉は「誠心」だという(「この人」『東奥日報』1983年5月11日, 「ひと」『デーリー東北』1983年5月11日)。

## 4. おわりに

既述のように、県議会は正副議長に、吉田博彦と中里信男を選出した。議会の主導権を握る自民党内(37人)内で、ポストの“たらい回し”をめぐって長老と12人の新人たちが激しく対立し、最終的に新人たちに押し切られた形で決着、新人たちは、「はばたく会」を結成した。

確かに、正副議長のたらい回しは全国的傾向であって、何も本県に固有の問題ではない。全国都道府県議会議長会の調べでは、議長4年任期は6県にすぎず、1年交代が21県もあるという。今回新人議員の申し入れは、①正副議長は任期4年を全うさせる、②次善策として最低2年間とする、という内容であった。「長老支配」にかみついた新人議員たちの申し入れは正論である、といってよいだろう（「解説：長老，新人激しく対立」『東奥日報』1983年5月11日、「社説：議長権威を自ら低める議会」『陸奥新報』1983年5月12日、「正副議長人事の舞台裏—たらい回しは許さぬ」『デーリー東北』1983年5月11日）。

## 第22章 議長：石田清治，副議長：毛内喜代秋（1984年10月12日，就任）

### <目次>

1. はじめに
2. 石田清治
3. 毛内喜代秋
4. おわりに

### 1. はじめに

県議会の第158回定例会は、1984年6月6日から21日まで開催された。前年、1983年5月の第73回臨時議会で、吉田博彦議長—中里信男副議長体制がスタートしてから1年経過していた。そこで、自民党内から今議会中に正副議長を交代する声があがった。しかし、重要案件を抱え、混乱を避けたいという思惑と後任人事を絞り切れない理由から見送りとなった（「県議会」『東奥年鑑 1985年版』〔東奥日報社，1984年〕，177頁）。

次いで第159回定例会が9月27日から10月12日まで開催され、議会最終日の10月12日、自民党は党内にくすぶっていた正副議長交代を強行した。新議長候補には、自民党所属で西津軽郡選出の当選5回を数える石田清治（70歳）を、また副議長候補に、同じく自民党所属で青森市選出の当選3

回の毛内喜代秋（57歳）を選び、議員総会に諮って了承を得た。

これには、野党はこぞって反対し、議会運営委員会がマヒし混乱した。だが、自民党は本会議で、野党欠席のまま正副議長選挙を行い、石田一毛内の正副議長コンビを実現させた（「県議会」『東奥年鑑 1986年版』〔東奥日報社、1985年〕、172頁）。

## 2. 石田清治

### ① 経歴

石田清治は1914年3月5日、西津軽郡柴田村（現・つがる市）に生まれた。東京農大卒業後、県庁に勤務。1951年、柴田村議、柴田村農協組合長を経て、村議会議長に就任している。1952年、柴田村長に当選し、1959年、木造町収入役、同助役を務めた。石田は県農業共済組合連合会長、西津軽郡土地改良区理事長を経て、1969年県議会議員補欠選（西津軽郡選挙区）で当選、5期連続当選。この間、1984年、議長に就任している。自民党県連党紀委員長などを歴任、1997年に死去、享年83であった（『青森県議会史自昭和50年～至昭和53年』〔青森県議会、1989年〕、1449頁）。

### ② 県議選での得票

・1969年9月の県議補選	13,073票（第一位）	自民党
・1971年4月の県議選	11,522票（第二位）	々
・1975年4月の県議選	12,558票（第一位）	々
・1979年4月の県議選	12,845票（第一位）	々
・1983年4月の県議選	12,453票（第三位）	々
（平均得票数）	12,490票	

### ③ 横顔

石田清治は、柴田村（木造町、その後つがる市）出身である。東京農大

卒で、戦後間もなく柴田村農協長を経て、同村議を振り出しに議長、村長に就任した。木造町に合併後は、同収入役、助役を歴任するなど、政治歴は古い。石田は、木造新田1万1千ヘクタールを受益面積にする西津軽土地改良区理事長、県農業共済連合会長など土地改良を中心に農業団体の重職を担う、農業土地改良の推進者である。白髪がよく似合う“おじさま”タイプで、趣味は将棋、山歩きだという（「この人」『東奥日報』1984年10月14日、「きょうの顔」『陸奥新報』1984年10月14日）。

### 3. 毛内喜代秋

#### ① 経歴

毛内喜代秋は1926年11月1日、五所川原町に生まれた。仙台通信講習所卒後、五所川原郵便局員となり、1945年4月、東奥日報社に入社した。社会部次長、整理部次長、およびラジオテレビ部長を歴任し、1969年に退社。1970年、青森市議に、また1975年、県議に転じて当選し、通算6期務めた（1987年落選、1991年に返り咲く）。その間、1984年、副議長に就任している。毛内は1974年、県都食品協同組合長、青森市朝野球協会会長などを歴任した（『青森県議会史 自昭和50年～至昭和53年』〔青森県議会、1989年〕、1444頁、『青森県人名事典』〔東奥日報社、2002年〕、1065頁）。

#### ② 県議選での得票

・1975年4月の県議選	10,956票（第四位）	無所属
・1979年4月の県議選	11,949票（第五位）	々
・1983年4月の県議選	12,304票（第八位）	自民党
・1991年4月の県議選	11,665票（第四位）	々
・1995年4月の県議選	10,113票（第七位）	々
・1999年4月の県議選	9,699票（第七位）	々
（平均得票数）	11,114票	

## ③ 横顔

毛内喜代秋は、五所川原町出身である。仙台通信講習所を卒業して、五所川原郵便局に勤務した。1945年、東奥日報社に入社し、戦後の混乱期を社会部、政治部記者として走り回った。その後、青森市議を経て、県議に当選し副議長に就任している。新聞記者出身だけに、カンと行動力には定評がある。毛内は議会活動のかたわら、中小企業の振興に務め、県中小企業団体連合会理事、県信用保証協会理事に就任した。スポーツは県、市の朝野球協会の副会長を務めるほどの愛好家で、趣味はゴルフだという（「この人」『東奥日報』1984年10月14日、「きょうの顔」『陸奥新報』1984年10月14日）。

## 4. おわりに

県議会の最終日の10月12日、議長交代劇で本会議が空転した。「たらい回し人事」について野党が、茶番劇、サル芝居だと反乱したのだ。結局、脚本通り、本会議で自民党多数でもって新正副議長が誕生したが、1期2人制から1期3人制が慣例化し前回、改革を唱えた1年生議員からも交代論がでるしまつで、結局、元のもくあみに戻ってしまった（「冬夏提言」『陸奥新報』1984年10月13日、「批判黙殺、たらい回し」『東奥日報』1984年10月13日）。

## 第23章 議長：今井盛男，副議長：野沢剛（1986年3月24日，就任）

## &lt;目次&gt;

1. はじめに
2. 今井盛男
3. 野沢剛
4. おわりに

## 1. はじめに

県議会の第165回定例会は、1986年2月28日から3月24日まで開催され、3月24日の最終日に、自民党が正副議長の交代を強行した。全野党が審議

をボイコットする中で、自民党単独により、議長には自民党で南津軽郡選出の当選5回の今井盛男（60歳）を、また副議長には、同じく自民党で八戸市選出の当選3回を数える野沢剛（60歳）を選んだ。このため、各党が合意していた「東北新幹線対策特別委員会」の設置はご破算となるなど、野党の反発を招いた県議会は、混乱の中で閉会を余儀なくされた（『県議会』〔東奥年鑑 1987年版〕〔東奥日報社，1986年〕，166頁）。

## 2. 今井盛男

### ① 経歴

今井盛男は1926年11月10日、南津軽郡平賀町に生まれた。弘前工業学校機械科卒で、中島飛行機製作所に勤務した。戦後、リング移出商、家電販売業を経営し、1955年、平賀町議に当選、連続4期務めた。1970年1月の県議補欠選で当選、これを6期務めた。この間、1986年、議長に就任している。今井は平賀商工会長、全国都道府県議会議長会副会長などを歴任し、また自民党県連副幹事長などに就任した。1996年には、勲三等瑞宝章を受章している（『青森県人名事典』〔東奥日報社，2002年〕，780頁）。

### ② 県議選での得票

・1970年1月の県議補選	9,904票（第一位）	自民党
・1971年4月の県議選	9,872票（第二位）	々
・1975年4月の県議選	11,283票（第三位）	々
・1979年4月の県議選	13,831票（第一位）	々
・1983年4月の県議選	11,753票（第四位）	々
・1987年4月の県議選	12,427票（第二位）	々
（平均得票数）	11,512票	

## ③ 横顔

今井盛男は、平賀町出身である。弘前工業卒。政界入りは、平賀町議であった父の影響で、1955年、平賀町議に当選、4期務め、1970年、県議に転身して当選6期務めた。この道30年の政治の大ベテランで、財政、経済にはうるさ型だ。県議会では、議会運営委員長をこなした手腕が実証済みだという。今井は商工人であり、県信用保証協会理事、県商工連合会副会長を歴任するなど、中小企業者に顔が広い。学生時代から卓球、相撲、テニスなどを愛するスポーツマンである一方、自らピアノを弾き、クラシック音楽を楽しむ趣味をもつ（『東奥日報』1986年3月25日、「きょうの顔」『陸奥新報』1986年3月26日）。

## 3. 野沢剛

## ① 経歴

野沢剛は1925年8月8日、八戸市に生まれた。県立八戸中学卒。1953年、妻神建設株式会社常務取締役役に就任。1959年、八戸市議に当選。連続4期当選を果たした。1975年、県議に転身して当選、連続7期務めた。この間、1986年、副議長に就任している。野沢は1986年、県消防協会会長に就任し、また自民党県連副幹事長など歴任した。藍綬褒章や消防長官功労賞を受けた。2011年12月10日に死去、享年86であった（『青森県人名事典』〔東奥日報社、2002年〕、1001頁）。

## ② 県議選での得票

・1975年4月の県議選	8,749票（第七位）	自民党
・1979年4月の県議選	9,358票（第七位）	々
・1983年4月の県議選	10,020票（第六位）	々
・1987年4月の県議選	11,492票（第五位）	々
・1991年4月の県議選	9,547票（第六位）	々

・1995年4月の県議選	11,512票（第四位）	新進党
・1999年4月の県議選	10,166票（第五位）	無所属
（平均得票数）	10,121票	

### ③ 横顔

野沢剛は、八戸市出身である。県立八戸中学卒後に予科練を志望、三沢の特攻隊に配属された。1969年、3度目の挑戦で、八戸市議に当選、時に、33歳。連続4期務めた。その後、県議に転身して当選、連続7期務めた。1986年、副議長に就任。剛の名前が示すように“質実剛健”の人だという。政治信条は「誠心誠意」。剣道は練士5段の腕前だ（『東奥日報』1986年3月25日、「きょうの顔」『陸奥新報』1986年3月26日）。

## 4. おわりに

本章の冒頭でも指摘したように、自民党は大義名分のない正副議長の交代を断行した。しかも、県政の重要な課題である、東北新幹線特別委員会の設置を犠牲にしてしまった。こうして事態について、『東奥日報』は次のように批判した。まさに正論である。

「野党のボイコット、自民党の単独審議は異常な事態といわねばならない。その責任の大半は理不尽ともいえる議長交代を強行した自民党にあるとってよい。背景にポストに対する異常な執着という多分に私的な動機のほか、多数派が常に抱いている派閥争いという要求を見逃すわけにいかない」（「社説：なぜいま正副議長交代か」『東奥日報』1986年3月25日）。

## 第24章 議長：原田一實，副議長：森内勇（1987年5月12日，就任）

### <目次>

1. はじめに
2. 原田一實
3. 森内勇
4. おわりに

### 1. はじめに

第11回県議選は1987年4月12日に行われ，新しい51人の県議が決まった。当選者は，自民党28人，社会党8人，共産党3人，公明党3人，民社党1人，および無所属9人であった。自民党は9議席を失って苦杯（その後，無所属から2人加えて30議席）。一方，社会党，共産党の革新勢力が躍進した。今回の県議選では，新人15人が当選したのが特筆される（藤本一美『戦後青森県政治史 1945年～2015年』〔志學社，2016年〕，274頁）。

県議会の第76回臨時会—「組織会」が5月12日に開会され，新議長には自民党で北津軽選出の当選5回の原田一實（57歳）が，また副議長には，同じく自民党で，青森市選出の当選3回の森内勇（49歳）が選出された。議会で過半数を占めた自民党は，正副議長職のみならず，正副委員長職ポストをすべて独占した（「県議会」『東奥年鑑 1988年版』〔東奥日報社，1987年〕，166頁）。

### 2. 原田一實

#### ① 経歴

原田一實は1929年7月10日，北津軽郡金木町（現・五所川原市）に生まれた。県立木造中学卒，日本大学農学部を中退している。1960年，金木町議当選，連続3期当選し，議長を務めた。1971年，県議に転出して当選，これを5期連続当選した。この間，1987年，議長に就任している。原田は自民党県連幹事長などを歴任し，県土地改連盟会長，全国土地改連理事な

どを務めた。県相撲連盟会長で藍綬褒賞や勲三等瑞宝章を受けている。2011年11月13日に死去し、享年82であった（『青森県人名事典』〔東奥日報社、2002年〕、1017頁、「きょうの顔」『陸奥新報』1987年5月13日）。

② 県議選での得票

・1971年4月の県議選	8,037票（第二位）	自民党
・1975年4月の県議選	9,751票（第二位）	々
・1979年4月の県議選	無投票当選	々
・1983年4月の県議選	10,923票（第二位）	々
・1987年4月の県議選	11,396票（第一位）	々
（平均得票数）	10,027票	

③ 横顔

原田一實は、旧金木町（現・五所川原市）嘉瀬出身である。旧制の木造中学を経て、日大農学部に進学したものの、中退している。日大時代は相撲部に籍を置いた。金木町議3期、県議5期と政治歴は30年を超す。原田は実行力を買われ、町議、県議でも議長に就任している。「農政をいかに確立するか。増える農家負担。米問題などに議会としての指針をしっかりと持ち対処していきたい」と第一次産業を重視する。“ドンチュウ”のニックネームで慕われ、趣味は読書、旅行だという（「この人」『東奥日報』1987年5月13日、「きょうの顔」『陸奥新報』1987年5月13日、『青森県人名事典』〔東奥日報社、2002年〕、1017頁）。

3. 森内勇

① 経歴

森内勇は1938年3月2日、青森市に生まれた。東京師導音楽学校卒。1957年、森内畜産を創設した。青森市農業協同組合理事などを歴任し、1971年、

青森市議当選，1期務めた。1979年，県議に転身して当選，連続5期務めた。この間，1987年，副議長に就任している。森内は県食肉環境衛生同業組合理事長，協同組合青森ビーフ流通センター会長などを歴任し，自民党県連総務会副会長を務めた。2005年には，外ヶ浜町長選に出馬して当選，3期務めた（『青森県議会史 自昭和58年～至昭和61年』〔青森県議会，1998年〕，1270頁）。

### ② 県議選での得票

・1979年4月の県議選	10,866票（第八位）	新自ク
・1983年4月の県議選	13,084票（第六位）	自民党
・1987年4月の県議選	11,729票（第六位）	々
・1991年4月の県議選	14,306票（第一位）	々
・1995年4月の県議選	12,872票（第二位）	々
（平均得票数）	12,571票	

### ③ 横顔

森内勇は，青森市出身である。若い頃から民謡が好きで歌手を目指し，東京師導音楽学校を卒業している。19歳の時，北海道で馬の買い付けを手掛け，森内畜産を創業し，農政畑を歩いた。1974年，自民党公認で青森市議に，1979年，新自由ク公認で県議に転身。その後，同クラブと袂を分かち，自民党に復党，連続5期務め，この間副議長に就任している。森内は2005年，外ヶ浜町長に当選，3期務めた。趣味はゴルフだ。「努力」「まじめ」が信条で，酒が入れば民謡も飛び出す，という。現県議の森内之保留は息子である（「きょうの顔」『陸奥新報』1987年5月13日，「この人」『東奥日報』1987年5月13日）。

### 3. おわりに

1987年5月12日、県議会の臨時会—「組織会」が開会され、予想通り正副議長は多数を占める自民党の原田一實と森内勇に決定した。今回、自民党は現職11人が大量に落選、現有議席を9減らし、公認候補者の当選は新人を含めて28人とどまった。そのためかどうかは知らないが、議長交代の密約は表面化せず、スンナリと決定を見た。しかし、議長の任期は、工藤省三（5期）、佐藤寿（5期）などを含めた3人でたらい回しになりそうだと、いう。困った悪習である（「議長に原田、副議長森内氏—今回も津軽から選出」『陸奥新報』1987年5月13日）。

## 第25章 議長：工藤省三，副議長：山内和夫（1989年3月20日，就任）

### <目次>

1. はじめに
2. 工藤省三
3. 山内和夫
4. おわりに

### 1. はじめに

県議会の第117回定例会は、1989年2月28日から3月20日まで開催され、県議会最終日の3月20日、正副議長の交代が追加議題に取り上げられ、新しい議長に、自民党所属で上北郡選出の当選5回の工藤省三（62歳）を、また副議長には、同じく自民党所属で青森市選出の当選3回の山内和夫（57歳）を選出した。これには、社会党と共産党が、自民党の「たらい回し」人事だと強く反発したものの、しかし、本会議では賛成多数で自民党側に押し切られた（「工藤省議長に山内副議長」『デーリー東北』1989年3月21日、「県議会」『東奥年鑑 1980年版』〔東奥日報社，1979年〕，185頁）。

## 2. 工藤省三

### ① 経歴

工藤省三は1926年12月7日、上北郡天間林村に生まれた。三本木農学校卒。1943年、農業に従事した。1946年、天間林村工藤製材所に勤務し、天間林村一本木開拓農協組合長、工藤組代表取締役などを歴任した。1971年、県議に当選、連続9期務めた。この間、1989年、議長に就任している。工藤は、自民党県連幹事長などを歴任し、1986年には、全国議長会より自治功労者として表彰された。2010年11月16日に死去、享年83であった（『青森県議会史 自昭和58年～至昭和61年』〔青森県議会、1998年〕、1277頁）。

### ② 県議選での得票

・1971年4月の県議選	8,342票（第三位）	無所属
・1975年4月の県議選	11,463票（第一位）	自民党
・1979年4月の県議選	14,334票（第一位）	々
・1983年4月の県議選	16,602票（第一位）	々
・1987年4月の県議選	12,166票（第一位）	々
・1991年4月の県議選	13,131票（第三位）	々
・1995年4月の県議選	13,970票（第一位）	無所属
・1999年4月の県議選	12,794票（第一位）	自民党
・2003年4月の県議選	無投票当選	々
（平均得票数）	12,850票	

### ③ 横顔

工藤省三は、天間林村出身である。三本木農学校卒。1971年に県議に初当選以後、9期連続当選を果たした。最後の2003年は、無投票当選である。趣味は釣りとマージャン。現県議の工藤慎康は、省三の孫で、上北郡選挙区では「工藤王国」が議席を堅持している（「きょうの顔」『陸奥新報』1989

年3月21日,「この人」『東奥日報』1989年3月21日)。

### 3. 山内和夫

#### ① 経歴

山内和夫は1931年7月18日,青森市に生まれた。青森工業高校を経て,政治大学校卒。1951年,山内板金株式会社に勤務。1963年,県連合青年団長に就任。1967年,青森市議に当選,連続2期務めた。1975年,県議に転身して当選,通算8期務めた(1983年落選,1987年に返り咲く)。この間,1989年,副議長に,2004年には議長に就任している。山内は自民党県連総務会長などを歴任し,1981年,県トランポリン協会会長,県環境衛生同業組合理事長などを務めた(『青森県人名事典』〔東奥日報社,2002年〕,1073頁,『青森県議会史 自昭和54年～至昭和57年』〔青森県議会,1996年〕,1304頁)。

#### ② 県議選での得票数

・1975年4月の県議選	11,731票 (第三位)	自民党
・1979年4月の県議選	12,548票 (第三位)	々
・1987年4月の県議選	16,245票 (第一位)	々
・1991年4月の県議選	13,929票 (第二位)	々
・1995年4月の県議選	12,788票 (第三位)	々
・1999年4月の県議選	11,643票 (第四位)	々
・2003年4月の県議選	11,994票 (第三位)	々
・2007年4月の県議選	11,373票 (第六位)	々
(平均得票数)	12,781票	

#### ③ 横顔

山内和夫は青森市出身である。青森工業高校,政治大学校卒。青年団で活躍し,青森市連合青年団長,県連合青年団長を務めた。青森市議を経て,

県議に当選、通算8期務め、副議長、議長に就任している。「まじめすぎる」とは自他ともに認める性格だそうだ。山内は「政治に信頼を」が政治信条で、趣味は山歩き、読書、および演劇鑑賞である（「この人」『東奥日報』1989年3月21日、「きょうの顔」『陸奥新報』1989年3月21日）。

#### 4. おわりに

今回の正副議長交代は、1期4年間に3人体制を慣例としている自民党のお家芸が背後にあった。人事回転を速めるため、慣例を維持してきたのだ。原田一實、森内勇の現正副議長は1987年5月に就任し、満2年近くになる。そこで、交代時期について昨年1988年9月の議会から論議されていたものの、東北新幹線問題や自民党議員団の分裂で見送られていた。このため、今回、正副議長の交代が浮上し、最終的には、野党の反対を押し切り、議長には工藤省三を、副議長には山内和夫を選出したのである（「工藤省三議長に山内副議長」『デーリー東北』1989年3月21日、「新議長に工藤省三」『東奥日報』1989年3月21日）。

### 第26章 議長：鳴海広道、副議長：芳賀富弘（1991年5月13日、就任）

#### <目次>

1. はじめに
2. 鳴海広道
3. 芳賀富弘
4. おわりに

#### 1. はじめに

1991年4月7日に県議選が行われ、51人の新県議が決定した。党派別では、自民党30人、公明党2人、社会党1人、民社党1人、農政連1人、および無所属が16人で、社会党は7議席から一挙に1議席に、また共産党は3議席からゼロと惨敗した。これに対して、自民党は現職が全員当選し、

現有議席と同じ30議席を確保した。その後、保守系無所属から10人が大量に入党、最終的に40議席という大所帯に膨らんだ(藤本一美『戦後青森県政治史 1945年～2015年』〔志學社, 2016年〕, 299～300頁)。

第79県議会の臨時会は5月13日に招集され、「組織会」が開かれた。同日の本会議で、議長には自民党で黒石市選出の当選5回の鳴海広道(50歳)を、また副議長には、同じく自民党で弘前市選出の当選3回の芳賀富弘(66歳)を選出した。自民党は県議選での圧勝を踏まえて、正副議長職のみならず、全ての常任委員会の委員長職を独占した(『東奥年鑑 1992年版』〔東奥日報社, 1991年〕, 168頁)。

なお、先の181回定例会(1990年2月28日～3月22日)の最終日の22日、議長交代問題で紛糾し、自民党内の協議により、結局、工藤省三の議長続行で決着している。このような議会運営のゴタゴタが、他の会派から厳しく批判されたのは、いうまでもない(「県議会」『東奥年鑑 1991年版』〔東奥日報社, 1990年〕, 166頁)。

## 2. 鳴海広道

### ① 経歴

鳴海広道は1941年3月10日、黒石町に生まれた。柏木農業高校卒、日本大学法学部を中退している。1967年、黒石市議当選、2期務めた。1975年、県議に転じて当選、通算6期務め、この間、1991年、議長に就任している。1998年、黒石市長に当選、4期務めた。鳴海は自民党県連政調会長などを歴任し、1985年、全国議長会より自治功労者として表彰された。また、青森県躰道協会会長、浅瀬石川土地改良区理事長などに就任している(『青森県議会史 自昭和58年～至昭和61年』〔青森県議会, 1998年〕, 1273頁, 『青森県人名事典』〔東奥日報社, 2002年〕, 991頁)。

## ② 県議選での得票数

・1975年4月の県議選	11,567票（第一位）	自民党
・1978年7月の県議補選	13,786票（第一位）	々
・1979年4月の県議選	13,976票（第一位）	々
・1983年4月の県議選	14,569票（第一位）	々
・1987年4月の県議選	13,856票（第一位）	々
・1991年4月の県議選	無投票当選	々
（平均得票数）	13,551票	

## ③ 横顔

鳴海広道は、黒石市出身である。柏木農業高校卒。日大法学部中退。黒石市議を経て、県議通算6期、1991年、議長に就任した。選挙には強く、最後は無投票で当選している。その後、黒石市長に当選、4期務めた。県議会議長に就任した時の挨拶で、「県政の課題として、東北新幹線の早期着工と農政の新しい展開」を挙げた。鳴海の好きな言葉は「ベストを尽くす」。趣味はゴルフ、躰道（五段）、読書で、アルコールは苦手の左党である（「この人」『東奥日報』1991年5月14日、「きょうの顔」『陸奥新報』1991年5月14日、『青森県人名事典』〔東奥日報社、2002年〕、991頁）。

## 3. 芳賀富弘

## ① 経歴

芳賀富弘は1925年4月26日、弘前市に生まれた。県立木造中学を経て、青森医専を卒業した。1957年、医学博士号を取得し、1958年、板柳町立病院、弘前市立石川病院勤務を経て、1964年、芳賀産婦人科医院を開業した。1983年、県議に当選、これを5期連続務めた。この間、1991年、副議長に就任している。芳賀は青森県臨床婦人科医会副理事長、弘前特別養護老人ホーム理事長などを歴任し、1999年、日本文化功労賞、2001年には、リン

カン世界平和賞を授与された。2010年12月に死去、享年85であった（『青森県議会史 自昭和58年～至昭和61年』〔青森県議会，1998年〕，1271頁，『青森県人名事典』〔東奥日報社，2002年〕，1003頁）。

## ② 県議選での得票

・1983年4月の県議選	10,639票（第六位）	自民党
・1987年4月の県議選	12,800票（第三位）	々
・1991年4月の県議選	13,244票（第一位）	々
・1995年4月の県議選	13,169票（第一位）	無所属
・1999年4月の県議選	9,692票（第五位）	々
（平均得票数）	11,909票	

## ③ 横顔

芳賀富弘は弘前市出身である。旧制の県立木造中学を経て、青森医専卒。弘前で産婦人科医院を開院した。「医療、福祉の向上のため尽力してきたが、限界を感じ」、医師から県議に転身。1991年、副議長に就任した。1988年、東北新幹線盛岡以北の着工が第三位となり、そのため自民党を離れて「自由クラブ」を結成。1999年、本格着工で、自民党に復党した。医院は娘の夫にまかせて、政治活動に専念している。趣味はゴルフと釣り。好きな言葉は「心」だそう（「この人」『東奥日報』1991年5月14日、「きょうの顔」『陸奥新報』1991年5月14日）。

## 4. おわりに

自民党県議団は1991年5月13日、議員総会を開き、正副議長候補について、「選考委員会」の報告を求め、議長に県連幹事長の鳴海弘道を、また副議長に芳賀富弘を選んだ。従来、議長は当選5回以上、副議長は3回以上という慣例をもとに、当選の連続性や副議長の経験を加味し、「党への

貢献度」(選挙戦での“論功行賞”)を最優先させた。この点が40人を抱える大所帯の自民党内で異論をはさませない最良の策として功奏した、といえる(「人選、貢献度を重視—自民党県議団」『陸奥新報』1991年5月14日)。

県議選での圧勝を踏まえて、自民党は各常任委員会の正副委員長を独占しただけでない。議会運営委員会の10人の委員も独占(5人以上の会派からのみ正委員)、県議会史上、一会派の議運委独占は初めてのことである(『東奥日報』1991年5月14日)。

## 第27章 議長：小原文平(1992年10月15日、就任)、副議長：沢田啓(1993年2月28日、就任)

### <目次>

1. はじめに
2. 小原文平
3. 沢田啓
4. おわりに

### 1. はじめに

県議会の第191回定例会は1992年9月30日に招集し、10月15日まで開かれた。最終日の10月15日、鳴海弘道が議長を辞任し、その後釜に、自民党で上北郡選出の当選5回の小原文平(70歳)が選出された。続いて、翌年1993年2月26日に招集された第193回定例会で、議長交代問題が浮上したものの、自民党は最終日の2月25日、小原議長の続投を決めた(「県議会」『東奥年鑑 1994年版』〔東奥日報社、1993年〕、171、172頁)。

一方、副議長については、前副議長の芳賀富弘が弘前市長選に立候補し、県議を辞職して空席となっていた。そこで、第189回定例会最終日の1993年2月28日、副議長に自民党で、三戸郡選出の当選3期の沢田啓(63歳)を選んだ(「県議会」『東奥年鑑、1993年版』〔東奥日報社、1992年〕、172頁)。

## 2. 小原文平

### ① 経歴

小原文平は1922年9月27日、上北郡七戸町に生まれた。早稲田大学文学部哲学科卒業後、1949年、七戸高校教諭を務めた。その後、小平商店社長、七戸町商工会会長、南部縦貫鉄道専務などを歴任し、1971年、県議に当選、通算6期務めた（1987年に落選したが、1991年に返り咲いた）。翌1992年、議長に就任している。小原は自民党県連副会長、県商工連合会会長などに就任し、1986年には、全国議長会より、自治功労者として表彰された。1999年に死去。享年77であった（『青森県人名事典』〔東奥日報社、2002年〕、130頁、『青森県議会史 自昭和58年～至昭和61年』〔青森県議会、1998年〕、1277頁）。

### ② 県議選での得票

・1971年4月の県議選	7,825票（第四位）	自民党
・1975年4月の県議選	10,616票（第二位）	々
・1979年4月の県議選	11,077票（第四位）	々
・1983年4月の県議選	13,722票（第二位）	々
・1991年4月の県議選	15,419票（第一位）	無所属
・1995年4月の県議選	11,053票（第二位）	自民党
（平均得票数）	11,619票	

### ③ 横顔

小原文平は、七戸町出身である。家業は肥料店。早稲田大文学部卒業後、南部縦貫鉄道に勤務し、専務を経て、県議に当選、通算6期務めた。1992年には議長に就任している。この間、「県議会新幹線対策特別委員会」の委員長として奔走、“ミスター新幹線”という異名をとった。小原は県商工連合会会長として県全体の産業振興にも力を注ぎ、同僚議員からは「温

厚，誠実な人柄」と人望も厚い。趣味は「無芸大食」というが，上京の折，歌舞伎芝居を見るのが楽しみだそうだ（『青森県人名事典』〔東奥日報社，2002年〕，130頁，「きょうの顔」『陸奥新報』1992年10月17日，「この人」『東奥日報』1992年10月17日）。

### 3. 沢田啓

#### ① 経歴

沢田啓は1929年1月21日，三戸町に生まれた。三本木農業学校を経て，東京獣医畜産専門学校を卒業した。1970年，三戸農協組合長を，青森県肉用牛協会会長などを歴任している。1983年，県議に当選，連続5期務めた。その間，1992年，副議長に就任した。県農業共済組合会長会長，県畜産農協連合会会長などを歴任した。沢田は獣医師でもあり，農林水産大臣賞を受賞している。2009年3月16日に死去，享年80であった（『青森県人名事典』〔東奥日報社，2002年〕，899頁，『青森県議会史 自昭和58年～至昭和61年』〔青森県議会，1998年〕，1279頁）。

#### ② 県議選での得票数

・1983年4月の県議選	13,159票（第二位）	自民党
・1987年4月の県議選	13,033票（第一位）	々
・1991年4月の県議選	12,573票（第一位）	々
・1995年4月の県議選	11,969票（第三位）	々
・1999年4月の県議選	9,980票（第三位）	々
（平均得票数）	12,143票	

#### ③ 横顔

沢田啓は三戸町出身である。三本木農業学校を経て，東京獣医畜産専門学校を卒業した。1983年，3度目の挑戦で，県議に当選し，これを連続5

期務めた。父の操も県議3期の政治家一家である。1988年、東北新幹線盛岡以北着工で三位に後退し、自民党に反発、「自民クラブ」を結成、自ら会長を務めた。獣医師で、青森県に黒毛和種（肉用牛）の導入に尽力した。沢田はひげとパイプがトレードマークで、趣味はカメラと狩猟である（「この人」『東奥日報』1992年2月29日）。

#### 4. おわりに

1993年2月28日、県議会第189回定例会が開会され、同日、空席となっていた副議長に自民党の沢田啓（三戸郡選出、当選3回）を選出した。副議長のポストは、前副議長の芳賀富弘が1月26日告示の弘前市長選に立候補し、県議を辞職したため空席となっていた（『東奥日報』1993年2月28日（夕））。

県議会191回定例会の最終日の1992年10月15日、議長選出の人選をめぐる紛糾した。自民党議員団が「議員総会」や「議長選考委員会」を繰り返すなど、本会議がストップするなど、議会の空転に野党から厳しい批判の声が上がった。結局、鳴海弘道議長が辞表を提出したのを受けて、新議長に自民党の小原文平（上北郡選出、当選5回）を選出した。なお、沢田啓副議長は留任した。一連の紛糾の背景には、代議士派閥の駆け引きや議員個人の思惑があったと、いわれている（「県議会議長に小原氏」『陸奥新報』1992年10月16日、「県議会議長に小原氏」『東奥日報』1992年10月16日、「小原氏を選任—自民、人選をめぐる紛糾」「ポスト軽視の行為だ」『デーリー東北』1992年10月16日）。

## 第28章 議長：佐藤寿，副議長：清藤六郎（1993年12月17日，就任）

### <目次>

1. はじめに
2. 佐藤寿
3. 清藤六郎
4. おわりに

### 1. はじめに

県議会の第196回定例会は、1993年11月30日から18日間開催され、最終日の12月17日、小原文平が議長職の辞表を、沢田啓も副議長職の辞表を提出した。後任の議長には、自民党で南津軽郡選出の当選5回の佐藤寿（73歳）が、また副議長には、同じく自民党で南津軽郡選出の当選3回の清藤六郎（70歳）が選ばれた。このように、いつものような、自民党の慣例による正副議長の交代劇について、野党側は一段と反発を強め、「交代の理由」が全く見当たらないと強く批判した（『県議会』『東奥年鑑 1995年版』〔東奥日報社，1994年〕，167頁）。

### 2. 佐藤寿

#### ① 経歴

佐藤寿は1920年5月14日、南津軽郡常盤村に生まれた。旧制の県立弘前中学を経て、県立青年学校教員養成所を卒業した。女鹿沢青年学校教諭を経て1962年、常盤村長に当選。1970年1月の県議補欠選挙で当選、通算6期務めた（1983年落選，1987年に返り咲く）。この間、1980年、副議長に、また1993年には、議長に就任している。佐藤は、自民党県連政調副会長などを歴任し、1996年には、勲四等旭日小授章を受章した。2007年9月7日に死去、享年87であった（『青森県議会史，自昭和50年～至昭和53年』〔青森県議会，1989年〕，1449～1450頁，『青森県人名事典』〔東奥日報社，2002年〕，896頁）。

## ② 県議選での得票

・1970年1月の県議補選	9,190票 (第二位)	自民党
・1971年4月の県議選	9,280票 (第三位)	々
・1975年4月の県議選	11,901票 (第二位)	々
・1979年4月の県議選	9,876票 (第三位)	々
・1987年4月の県議選	11,780票 (第三位)	々
・1991年4月の県議選	8,926票 (第四位)	々
(平均得票数)	10,159票	

## ③ 横顔

佐藤寿は常盤村生まれである。旧制弘前中学を経て青年学校教員養成所卒。戦時中は青年学校教諭を務めた。戦後も青年団活動に専念、1947年の県議選を皮切りに政治の世界に入る。常盤村長1期、県議6期を務めた。副議長を経て、議長に就任した時は、議会最長老の73歳であった。常盤スイカ、常盤養鶏、トキワ養豚と、常盤という名前の生産物は、全て村長時代の業績であり、アイデア村長として知られる。佐藤は副議長に就任するまで、神四平と激しいつばぜり合い演じ、それだけに「和」をことのほか意識している、という。弘前中学時代から続けている詩吟と書画の鑑賞が趣味で、座右の銘は「真心」である（「この人」『東奥日報』1980年7月15日、「きょうの顔」『陸奥新報』1980年7月16日、「この人」『東奥日報』1993年12月18日、「きょうの顔」『陸奥新報』1993年12月18日）。

## 3. 清藤六郎

## ① 経歴

清藤六郎は1923年6月28日、黒石町に生まれた。1952年、日本大学専門部歯科卒。1966年、歯科医を開業した。1983年、県議当選、連続5期務め、この間、1993年、副議長に就任している。清藤は自民党県連政調副会長な

どを歴任、また県重量挙げ協会会長、県バトミントン協会会長、県バイアスロン協会会長。県体育協会会長、および日本重量挙げ協会副会長などを務めた。2018年4月16日に死去、享年94であった（『青森県議会史、自昭和58年～至昭和61年』〔青森県議会、1998年〕、1276頁、「この人」『東奥日報』1993年12月18日）。

### ② 県議選での得票数

・1983年4月の県議選	13,515票（第一位）	無所属
・1987年4月の県議選	11,737票（第四位）	自民党
・1991年4月の県議選	10,352票（第三位）	無所属
・1995年4月の県議選	無投票当選	々
・1999年4月の県議選	7,193票（第四位）	々
（平均得票数）	10,699票	

### ③ 横顔

清藤六郎は黒石町出身である。日本大学専門部歯科卒。1966年に歯科医を開業した。1983年、県議当選、連続5期務めた。この間、1993年、副議長に就任している。ひょうひょうとした話し方が魅力だという。清藤の趣味は狩猟で、座右の銘は「特にないが、人と付き合うのに、心の触れ合う付き合いをしたい」と語る（「この人」『東奥日報』1993年12月18日、「きょうの顔」『陸奥新報』1993年12月18日）。

## 4. おわりに

第196回定例会では議長交代問題が焦点となり、最大会派で事実上選任権を有する自民党内の調整難航が予想された。だが、1992年10月の時ように、本会議を7時間も空転させ、深夜までもつれた時に比べれば、比較的スムーズに終了した、といってよい（「県会議長に佐藤氏」『東奥日報』1993

年12月18日)。

なお、正副議長は、佐藤—清藤コンビの南津軽郡選出となった。ただ、過去にも脇川利勝議長—神四平副議長コンビのように、西津軽郡の同一選挙区から選出された事例がある。従来も、正副議長のいずれかを津軽と南部で分けあったり、別の選挙区から選出したりしていた(「県会議長に佐藤氏 副は清藤氏—同一選挙区 異例の人事」『陸奥新報』1993年12月18日)。

自党内では、議長が5回以上の当選組、副議長が3回当選組などと暗黙の了解があり、しかも津軽と南部のバランスを考慮して選出するのが通例であった。だが、三八地区で調整がつかなかった。副議長経験者が議長に就任したのは、慣例を破った人事ではあるものの、それが「議会改革」であったとはいえない(『東奥日報』1993年12月18日)。

## 第29章 議長：高橋長次郎，副議長：丸井彪（1995年5月10日，就任）

### <目次>

1. はじめに
2. 高橋長次郎
3. 丸井彪
4. おわりに

### 1. はじめに

任期満了に伴う県議選は1995年4月9日に行われ、10選挙区の39人の当選が決まり、無投票の5選挙区の12人と合わせて51人の新しい県議が確定した。知事選の敗退で野党に転落した自民党は、現有議席を7つ減らして当選者は25人に留まり、過半数割れとなった。一方、与党の新進クは、推薦を合わせて現有議席に6議席上乘せして10人が当選し、友党の公明党も、2議席を確保。革新勢力では社会党が2議席を奪回、また共産党も2議席確保、無所属は10議席であった(藤本一美『戦後青森県政治史 1945年～2015年』[志學社、2016年]、330～331頁)。

新議会の「組織会」として第80回臨時会が5月10日に招集され、新議長に自民党所属で八戸市選出の当選6回の高橋長次郎（71歳）を、また副議長に、同じく自民党所属で十和田市選出の当選4回の丸井彪（64歳）を選出した。最大野党の自民党が正副議長の座を独占したものの、所属議員の造反の可能性や反発などで、内部説得に時間を費やし、会派内に不協和音を抱えての対応だった（『県議会』『東奥年鑑 1996年版』『東奥日報社、1995年〕、172頁、「旧態依然の議長人事』『デーリー東北』1995年5月11日）。

## 2. 高橋長次郎

### ① 経歴

高橋長次郎は1923年11月13日、南部の八戸町に生まれた。八戸白銀尋常小学校卒。1949年、八戸市議に当選、連続2期務めた。1975年、県議に転身して当選、これを連続7期務め、この間、1995年、議長に就任している。高橋は八戸漁連会長、県サケマス漁業振興会会長、全国大型イカ釣り協会会長などを歴任し、また、自民党県連幹事長などを務めた。1985年、全国議長会より自治功労者として表彰され、1986年には、黄綬褒章を受章した。2008年7月9日に死去、享年75であった（『青森県議会史、自昭和58年～至昭和61年』〔青森県議会、1998年〕、1272頁）。

### ② 県議選での得票数

・1975年4月の県議選	12,076票（第一位）	自民党
・1979年4月の県議選	12,952票（第二位）	々
・1983年4月の県議選	12,713票（第三位）	々
・1987年4月の県議選	14,042票（第三位）	々
・1991年4月の県議選	14,370票（第二位）	々
・1995年4月の県議選	11,213票（第五位）	々
・1999年4月の県議選	10,105票（第七位）	々

(平均得票数) 12,496票

### ③ 横顔

高橋長次郎は、八戸町出身である。八戸市議2期を経て、県議に当選、連続7期を誇る。4期目の1989年、自民党公認で参議院選にも出馬したが、次点2位で落選を喫した。高橋は、八戸漁連会長などを歴任した八戸市水産界の重鎮であり、「浜のタカチョウさん」の愛称で親しまれ豪放らい落な人柄である。議長選では、51票中48票を獲得したのが特筆される。趣味は読書、将棋、囲碁で、座右の銘は「和をもって尊し」である（「この人」『東奥日報』1995年5月11日、「きょうの顔」『陸奥新報』1995年5月11日、「ひと」『デーリー東北』1995年5月11日）。

## 3. 丸井彪

### ① 経歴

丸井彪は1931年2月16日、十和田町に生まれた。三本木農業学校卒後の1948年、藤坂村農業協同組合に勤務した。1973年、丸井商事取締役社長に就任、1981年、十和田重車輛取締役社長などを歴任、1983年には、県議に当選し、これを6期務めた。この間、1995年、副議長に就任している。1994年、自民党県連政調会長に就任（『青森県議会史、自昭和58年～至昭和61年』〔青森県議会、1998年〕、1274頁）。

### ② 県議選での得票数

・1983年4月の県議選	13,761票（第一位）	自民党
・1987年4月の県議選	12,593票（第一位）	々
・1991年4月の県議選	11,665票（第一位）	々
・1995年4月の県議選	無投票当選	々
・1999年4月の県議選	12,663票（第一位）	々

・2003年4月の県議選	10,874票（第一位）	々
（平均得票数）	12,311票	

### ③ 横顔

丸井彪は十和田町の出身である。三本木農学校を卒業し、1982年9月、県議だった兄が急死、支持者の後押しもあって1983年の県議選にピンチヒッターで初当選し、以来、連続6期務めた。選挙には強い。1995年には、副議長に就任している。「性格は短気、いろんな役職を経験してかなり丸くなった」と自己分析する。座右の銘は「和」で、趣味は一人旅と庭木（「この人」『東奥日報』1995年5月11日、「きょうの顔」『陸奥新報』1995年5月11日、「ひと」『デーリー東北』1995年5月11日）。

## 4. おわりに

新議長に選出された高橋長次郎は、本会議の投票で48票獲得した一方、副議長の丸井彪は自民党だけの25票に留まった。正副議長とも自民党の候補だった。しかし、二人の得票差は「議長は第一会派（自民党）から、副議長は第二会派（新進ク）からだすべき」との考えにより、自民党、共産党以外の各会派と無所属議員が投票で示した同一歩調の結果であった（「県議会一副議長選は1票差」『東奥日報』1995年5月11日）。

なお、この他に新進ク側が求めている6常任委員会の正副委員長のポストを「ドント方式」による配分も自民党が了承するなど、自民党にとって、知事選で野党に転落した上に、議席が25と過半数を割った影響が随所で見られた（「議長高橋氏 副丸井氏」『陸奥新報』1995年5月11日）。

### 第30章 議長：高橋弘一，副議長：長峰一造（1997年8月28日，就任）

#### <目次>

1. はじめに
2. 高橋弘一
3. 長峰一造
4. おわりに

#### 1. はじめに

県議会の第83回臨時会は、1997年8月26日に招集，3日間開会された。最終日の28日，議長の高橋長次郎と副議長の丸井彪が「一身上の都合」を理由に正副議長職を辞任した。後任の議長には，自民党所属で青森市選出の当選6回を数える高橋弘一（62歳）を，また副議長には，新自ク所属で北津軽郡選出の当選4回の長峰一造（71歳）を選んだ。

自民党は結党以来，第1会派として正副議長のポストを独占してきたものの，今回初めて第2会派から副議長が誕生したのが特筆される。それは，県議会の「保・保連合」のなせる業であった（『県議会』『東奥年鑑 1999年版』〔東奥日報社，1998年〕，75頁，『陸奥新報』1997年8月29日）。

今回，珍しく約2年4ヶ月の間，正副議長の交代がなかった。その背景には，会派勢力が与野党間で拮抗し，議会で過半数確保が困難であった他に，高橋長次郎が全国県議会議長会会長に就任したという，「特殊事情」によるものだ（『陸奥新報』1997年8月29日）。

#### 2. 高橋弘一

##### ① 経歴

高橋弘一は1934年11月20日，青森市に生まれた。青森工業高校卒。1953年，高橋鉄工所専務取締役役に就任した。1969年，青森青年会議所理事長となり，1970年，青森市議に当選，連続2期務めた。1975年，県議に転身して当選，連続8期務め，この間，1997年，議長に就任している。高橋は，

自民党県連総務副会長、青森市体育協会会長などを歴任し、1985年、全国議長会より、自治功労者として表彰されている。1994年には、藍綬褒章を受章した（『青森県人名事典』〔東奥日報社、2002年〕、932頁、『青森県議会史、自昭和58年～至昭和61年』〔青森県議会、1998年〕、1269頁）。

### ② 県議選での得票数

・1975年4月の県議選	10,443票（第五位）	自民党
・1979年4月の県議選	16,096票（第一位）	々
・1983年4月の県議選	17,670票（第一位）	々
・1987年4月の県議選	14,150票（第二位）	々
・1991年4月の県議選	12,832票（第三位）	々
・1995年4月の県議選	13,302票（第一位）	々
・1999年4月の県議選	13,822票（第一位）	々
・2003年4月の県議選	11,084票（第五位）	々
（平均得票数）	13,875票	

### ③ 横顔

高橋弘一は青森市出身である。青森工業高校卒業後青森市議を経て、1975年、県議に当選、連続8期務め、1997年には議長に就任した。息子の修一も県議3期目の「政治家一家」だ。高橋は青工時代、バレー選手として活躍、議長就任時には、身長178センチ、体重88キログラムのいでたちだった。青森市消防団長も務め、空手道場を開き、子供たちに訓練の場を提供している。趣味はスポーツ。愛称は「たかこうさん」で、「明朗かつ達」がモットーであるという（「この人」『東奥日報』1997年8月29日、「今日の顔」『陸奥新報』1997年8月29日）。

### 3. 長峰一造

#### ① 経歴

長峰一造は1925年9月28日、北津軽郡鶴田町に生まれた。五所川原農学校卒。1954年、農業実習生として渡米している。1955年、鶴田町妙堂崎農協専務理事に就任し、青森県りんご協会理事・会長などを歴任した。1983年、県議に当選、5期務め、その間、1997年、副議長に就任している。長峰は青森県キャンプ協会会長に就任し、1952年に、農林大臣賞を、また1990年には、黄綬褒章を受けた。2008年7月1日に死去、享年72であった（『青森県議会史、自昭和58年～至昭和61年』〔青森県議会、1998年〕、1269頁、『青森県人名事典』〔東奥日報社、2002年〕、978頁）。

#### ② 県議会選での得票数

・1983年4月の県議選	10,806票（第三位）	無所属
・1987年4月の県議選	10,206票（第二位）	自民党
・1991年4月の県議選	10,724票（第三位）	々
・1995年4月の県議選	無投票当選	新進ク
・1999年4月の県議選	9,452票（第二位）	無所属
（平均得票数）	10,297票	

#### ③ 横顔

長峰一造は鶴田町出身である。五所川原農学校卒業後、リンゴづくり一筋だった。県りんご協会会長時代に、リンゴ輸入を懸念する生産者に推されて政治の世界へ入り、県議選に出馬して当選した。長峰は県りんご協会顧問、県キャンプ協会会長を務めた。趣味はカラオケ、庭木手入れで、座右の銘は「一心萬宝」だという（「この人」『東奥日報』1997年8月29日、「きょうの顔」『陸奥新報』1997年8月29日）。

#### 4. おわりに

1997年8月の時点で、自民党は47議席中19議席で最大会派とはいえ、過半数割れになった。一方、新進クなど与党3党は20議席を確保した。自民党が議長職を確保するには、新進クとの協調が不可欠であって、ポスト配分で合意が内々できていたという。だから、さしたる混乱もなく、正副議長の交代が比較的スムーズに終了したのであろう（「議長に高橋氏、副は新進・長峰氏」『東奥日報』1997年8月29日）。

### 第31章 議長：毛内喜代秋，副議長：中村寿文（1998年10月12日，就任）

#### <目次>

1. はじめに
2. 毛内喜代秋
3. 中村寿文
4. おわりに

#### 1. はじめに

県議会の第215回定例会は、1998年9月25日に招集し、10月12日まで開催された。最終日の12日、高橋弘一が議長職を、また長峰一造が副議長職をそれぞれ辞任した。後任の議長には、自民党で青森市選出の当選5回の毛利喜代秋（71歳）が、また副議長には県政会所属で八戸市選出の当選4回の中村寿文（59歳）が選出された。副議長に県政会所属の中村寿文が選出されたのは、県政会が与党であり、自民党が野党に転落したからだ（「県議会」『東奥年鑑 2000年版』〔東奥日報社，1999年〕，85頁）。

今回のように、半年の議長任期は県議会史上最短で、副議長では二番目であり、県議会の任期が約6ヵ月しかない中での正副議長の交代劇は、野党から強い批判を浴びた。何故なら、「任期中は議長3人」という慣例を大会派主導で押し切ったからだ（「任期わずか半年なのに…県議機会正副議長交代」『東奥日報』1998年10月13日）。

## 2. 毛内喜代秋

### ① 経歴

毛内喜代秋は1926年11月1日、五所川原町に生まれた。仙台通信講習所を卒業して五所川原郵便局に勤務。1945年4月、東奥日報社に入社し、社会部次長、整理部次長、およびラジオテレビ部長を歴任、1969年に退社した。1970年、青森市議当選。1975年、県議に転じ通算6期務めた（1987年落選、1991年に返り咲く）。その間、1984年、副議長に、1998年には、議長に就任している。毛内は1974年、県食品協同組合長、県朝野球連盟会長に就任し、1986年、全国議長会より、自治功労者として表彰された（『青森県議会史 自昭和58年～至昭和61年』〔青森県議会、1998年〕、1270頁、『青森県人名事典』〔東奥日報社、2002年〕、1065頁）。

### ② 県議選での得票

・1975年4月の県議選	10,956票（第四位）	無所属
・1979年4月の県議選	11,949票（第五位）	々
・1983年4月の県議選	12,304票（第八位）	自民党
・1991年4月の県議選	11,665票（第四位）	々
・1995年4月の県議選	10,113票（第七位）	々
・1999年4月の県議選	9,699票（第七位）	々
（平均得票数）	11,114票	

### ③ 横顔

毛内喜代秋は、五所川原町出身である。仙台通信講習所卒業後、五所川原郵便局に勤務した。1945年、東奥日報社に入社し、戦後の混乱期を社会部、政治部記者として走り回った。その後、青森市議を経て、県議に当選、副議長や議長に就任した。新聞記者出身だけに、カンと行動力は定評である。毛内は議会活動のかたわら、中小企業の振興に務め、県中小企業団体連合

会理事，県信用保証協会理事に就任した。スポーツは県や市の朝野球協会の会長を務めるほどの愛好家で，「和」の大切さを強調する円熟の人である。趣味はゴルフだという（「この人」『東奥日報』1998年10月14日，「きょうの顔」『陸奥新報』1998年10月14日）。

### 3. 中村寿文

#### ① 経歴

中村寿文は1939年8月4日，南部の八戸市に生まれた。県立八戸高校を経て，慶應義塾大学法学部卒。1963年，東北電力に入社した。1974年に同社を退社し，船田中衆議院議員の秘書となる。1983年県議に当選，連続5期務めた。この間，1998年，副議長に就任している。2001年，八戸市長に当選，1期務めた。父は県議，八戸市長，衆議院議員を務めた中村拓道である（『青森県議会史 自昭和58年～至昭和61年』〔青森県議会，1998年〕，1272頁，『青森県人名事典』〔東奥日報社，2002年〕，980頁）。

#### ② 県議選での得票数

・1983年4月の県議選	21,853票（第一位）	無所属
・1987年4月の県議選	17,390票（第一位）	自民党
・1991年4月の県議選	15,514票（第一位）	々
・1995年4月の県議選	14,558票（第一位）	新進党
・1999年4月の県議選	11,738票（第二位）	無所属
（平均得票数）	16,211票	

#### ③ 横顔

中村寿文は八戸市出身である。県立八戸高校を経て，慶應義塾大学法学部卒。10年以上東北電力に勤務した。周囲の要望を受け，父の志を継いで政治家の道へ。県議に5回連続当選している。その後，八戸市長に就任し

た。親子二代で県議、市長を務めた政治家一家である。また親子二代にわたり副議長に就任した。政治信念は「信なくば立たず」で、趣味は登山、書店めぐりだ、という（「この人」『東奥日報』1998年10月14日、「きょうの顔」『陸奥新報』1998年10月14日）。

#### 4. おわりに

1998年の正副議長交代劇について、東奥日報は「社説：“反省”は県議会にも必要だ」の中で、次のように批判した。

「県議会の最終日、にわかにな副議長が交代した。どう見ても県民のひんしゆくを買ってきた“たらい回し”人事の再現である。今度もまた、両ポストを分ける大会派、野党・自民党と与党・県政会による水面下の調整、つまり“談合”でことが運ばれた、とみなされるてん末だ。来年4月の統一地方選で改選を迎える県議。わずか半年しかない議長の任期は、戦後の県議会史上で最も短いものになる」（『東奥日報』1998年10月14日）。

東奥日報がいみじくも指摘しているように、悪しき慣行を維持する大会派の「御都合主義」がのさばっている、としか言いようがない。正副議長交代の談合は、「地方分権」の潮流に逆行するものであって、保守系県議には深い反省が求められる。

### 第32章 議長：太田定昭，副議長：間山隆彦（1999年5月12日，就任）

<目次>

1. はじめに
2. 太田定昭
3. 間山隆彦
4. おわりに

#### 1. はじめに

県議選が1999年4月11日に行われ、無投票当選を含めて51人の新県会議

員が決まった。当選者は、自民党21人、県民協会16人、公明党2人、共産党2人、社民党1人、および無所属9人である。新たな勢力図は、与党が県民協会、公明党、および与党系無所属を加えて24人で過半数に届かず、野党は自民党、共産党、社民党、野党系無所属を加えて27人であった。この結果は、県民が、大筋で県政与党を支持すると審判を下した一方で、木村守男県政に絶対的安定を与えなかった、ことを意味する（藤本一美『戦後青森県政治史 1945年～2015年』〔志學社、2016年〕、354頁）。

新議会の「組織会」である第84回臨時議会は5月13日に開会され、新議長に自民党で南津軽郡選出の当選5回の太田定昭（61歳）を、また副議長に、与党統一会派の政風・公明で八戸市選出の当選5回の間山隆彦（54歳）を選んだ。公明党出身の副議長は、県政史上初めてのことである（「議長に自民・太田氏一副は間山氏（正風・公明）」『東奥日報』1999年5月13日）。

## 2. 太田定昭

### ① 経歴

太田定昭は、1937年9月28日、南津軽郡浪岡町（現・青森市）に生まれた。1956年、東奥義塾高校卒業後農業に従事した。1967年、浪岡町議に当選、連続3期務めた。1979年、県議に転じて当選、通算5期務めた（1987年落選、1991年に返り咲く）。この間、1999年、議長に就任している。太田は浪岡町連合青年団長、南津軽郡連合青年団長を歴任し、また自民党県連政調会長、同幹事長などを務めた。1977年、全国知事会より、自治功労者として表彰された。2011年8月8日に死去、享年74であった（『青森県議会史 自昭和58年～至昭和61年』〔青森県議会、1998年〕、1276頁、「この人」『東奥日報』1999年5月14日）。

### ② 県議選での得票

・1979年4月の県議選            10,105票（第二位）        無所属

・1983年4月の県議選	13,426票（第二位）	自民党
・1991年4月の県議選	12,635票（第二位）	々
・1995年4月の県議選	無投票当選	々
・1999年4月の県議選	12,312票（第二位）	々
（平均得票数）	12,120票	

### ③ 横顔

太田定昭は浪岡町出身である。東奥義塾高校卒。浪岡町議3期を経て、県議会議員に当選、5期務めた。与野党折衝などここ一番の行動力には定評がある。太田は愛馬の「クロ」と2時間かけて自宅周辺を散歩するのが日課だという。「親孝行で、思いやりのある人」とは夫人の評である。座右の銘は「協調」で、趣味は野球である（「この人」『東奥日報』1999年5月13日）。

## 3. 間山隆彦

### ① 経歴

間山隆彦は1944年7月20日、八戸市に生まれた。県立八戸高校を経て、日本大学法学部卒。1968年、八戸市役所に勤務した。1970年、公明党本部で衆議院議員秘書となり、1975年、八戸市議当選、2期務めた。1983年、県議に転じて当選、連続6期務め、この間、1999年、副議長に就任している。間山は、公明党県本部書記長などを歴任、藍綬褒章を受章している（『青森県議会史 自昭和58年～至昭和61年』〔青森県議会、1998年〕、1272頁、『青森県人名事典』〔東奥日報社、2002年〕、1047頁）。

### ② 県議選での得票

・1983年4月の県議選	10,881票（第四位）	公明党
・1987年4月の県議選	11,461票（第六位）	々

・ 1991年 4 月の県議選	9,645票 (第四位)	々
・ 1995年 4 月の県議選	9,905票 (第七位)	々
・ 1999年 4 月の県議選	10,150票 (第六位)	々
・ 2003年 4 月の県議選	11,596票 (第二位)	々
(平均得票数)	10,606票	

### ③ 横顔

間山隆彦は八戸市出身である。県立八戸高校を経て、日本大学法学部卒。公明党の古寺宏衆議院議員の秘書から、八戸市議を2期務め。県議に当選、これを連続6期務めた。この間、副議長に就任している。間山は、1991年から公明党県本部長として組織を束ねてきた。周囲の評では「温厚で親しみやすい性格」だという。八高時代は相撲部に所属し、水泳も得意のスポーツマン。好きな言葉は「努力」と「忍耐」。趣味は読書、ドライブだそう(「この人」『東奥日報』1999年5月13日、「きょうの顔」『陸奥新報』1999年5月13日、『青森県人名事典』〔東奥日報社、2002年〕、1047頁)。

## 4. おわりに

1999年の正副議長の選出プロセスについて、東奥日報は「社説：“なれ合い県議会”はごめんだ」の中で次のように顛末を説明している。「勢力拡大にしのぎを削った末、与党統一会派“政風・公明”と野党の自民党会派は、いずれも22人の同数に留まった。これを受け両陣営が協議した結果、人事での対立と混乱を避けるため、今回の正副議長選では自民党が議長、政風・公明が副議長におさまる妥協案で決着した」(『東奥日報』1999年5月13日)。

正副議長の決着については、陸奥新報もまた「社説：県民にわかりやすい県議会に」の中で、与党三党の統一問題に言及して次のように批判している。「間山代表は急転直下の合流の根拠を“与野党関係者の誠意”と

語った。が、当初掲げた統一会派入りの条件のうちクリアされたのは会派名に“公明”を残しただけである。何のための一本化なのか県民には分かりにくい」(『陸奥新報』1999年5月13日)。

### 第33章 議長：秋田柗則，副議長：平井保光（2000年10月11日，就任）

#### <目次>

1. はじめに
2. 秋田柗則
3. 平井保光
4. おわりに

#### 1. はじめに

県議会の第223回定例会は2000年10月11日，最終日を迎えた。この日の本会議では，議長の太田定昭と副議長の間山隆彦が「一身上の都合」を理由に正副議長の辞職願いを提出した。選挙の結果，新議長に，自民党所属で西津軽郡選出の当選5回の秋田柗則（68歳）が，また新副議長に，政風・公明党所属で下北郡選出の当選4回の平井保光（77歳）がそれぞれ選ばれた。

正副議長の任期は，本来，議員任期中の4年のはずである。しかし，これまで「4年間に3人の交代」が慣例化しており，今回もこれに習った形となった。県民や野党から，“たらい回し”だとの批判はあったものの，全く改善されはしなかった（「議長に秋田氏選出—副議長平井氏」『陸奥新報』2000年10月12日）。

#### 2. 秋田柗則

##### ① 経歴

秋田柗則は1932年7月25日，西津軽郡車力村（現・つがる市）に生まれた。県立木造高校卒，早稲田大学政経学部を中退している。1958年，竹内

俊吉・衆議院議員の秘書に、また1963年、竹内黎一・衆議院議員の秘書となった。秋田は1980年以降、衆議院自民党秘書会長、衆議院秘書協議会会長、みちのく菅機代表取締役を歴任し、1983年、県議に当選、連続5期務め、この間、2000年、議長に就任している（『青森県議会史 自昭和58年～至昭和61年』〔青森県議会、1998年〕、1275頁、『青森県人名事典』〔東奥日報社、2002年〕、754頁）。

### ② 県議選での得票

・1983年4月の県議選	13,018票（第二位）	自民党
・1987年4月の県議選	10,399票（第二位）	々
・1991年4月の県議選	15,261票（第一位）	々
・1995年4月の県議選	15,258票（第一位）	々
・1999年4月の県議選	無投票当選	々
（平均得票数）	13,484票	

### ③ 横顔

秋田柗則は車力村出身である。県立木造高校卒、早稲田大学政経学部を中退。衆議院議員の秘書、秘書会会長を経て、県議に当選、5期連続当選した。この間、2000年議長に就任している。秋田は「11人兄弟の11番目。小作農のせがれとして車力村に生を受けた。悲惨な津軽地域の状況を改善したい—という思いから政治の道」を志した、と議長就任の挨拶で述べた。座右の銘は、常に大衆とともに歩めで、趣味は、読書、水中ウォーキング、だという（「この人」『東奥日報』2000年10月12日、「きょうの顔」『陸奥新報』2000年10月12日、『青森県人名事典』〔東奥日報社、2002年〕、754頁）。

### 3. 平井保光

#### ① 経歴

平井保光は1923年3月3日、下北郡風間浦村に生まれた。長崎県佐世保修成中学卒。1967年、風間浦村長に当選し、これを5期20年務めた。県町村会会長に就任した後、1987年、県議に転じて当選、5期務め、この間、2000年、副議長に就任している。平井は県市町村職員共済組合理事長、県漁港協会副会長などを歴任した（『青森県人名事典』〔東奥日報社。2002年〕、1020頁）。

#### ② 県議選での得票数

・1987年4月の県議選	10,536票（第一位）	無所属
・1991年4月の県議選	無投票当選	自民党
・1995年4月の県議選	8,963票（第一位）	々
・1999年4月の県議選	7,369票（第一位）	無所属
（平均得票数）	8,956票	

#### ③ 横顔

平井保光は風間浦村出身である。中学は長崎県の佐世保修成中学卒である。風間浦村長を長く務め、県議に当選した。1923年生まれなので、県議の中では77歳と二番目の最年長者だ。周囲からは、論客だと評されている。平井は尊敬する人物に、木村守男元知事を挙げる。座右の銘は「人間は謙虚であれ」で、趣味は磯釣り、マージャンだという（「この人」『東奥日報』2000年10月12日、「きょうの顔」『陸奥新報』2000年10月12日）。

### 4. おわりに

自民党は2000年3月、政風・公明会派から7人が復党し、それまでの22人の勢力だったのが、一挙に29人と単独過半数を超える最大会派となった。

そこで、役員会では、正副議長ポストを独占すべきだという意見がでた。しかし、議会の円満運営を優先し、与党第二会派に副議長を割り振ることになった。それは、喜ばしいことであった（「新議長に秋田氏—副議長は平井氏」『東奥日報』2000年10月12日）。

### 第34章 議長：富田重次郎，副議長：神山久志（2001年12月18日，就任）

<目次>

1. はじめに
2. 富田重次郎
3. 神山久志
4. おわりに

#### 1. はじめに

県議会定例会は2001年12月17日、会期を18日まで1日延長した上で、正副議長選挙の日程を追加した。投票の結果、議長に自民党所属で西津軽郡選出の当選5回を数える富田重次郎（66歳）が、また副議長に同じく自民党所属で東津軽郡選出の当選4回の神山久志（54歳）がそれぞれ選ばれた。自民党が正副議長のポストを独占したのは、1995年5月以来、6年半ぶりのことであった。ただ、ポストの「たらい回し」については、野党と県民から大きな批判を浴びた（「県会議長に富田氏」『陸奥新報』2001年12月19日、「県議会」『東奥年鑑 2003年版』〔東奥日報社，2002年〕，81頁）。

#### 2. 富田重次郎

##### ① 経歴

富田重次郎は、1935年8月4日、西津軽郡鯨ヶ沢町に生まれた。県立木造高校卒。日本大学理工学部を中退している。1967年、鯨ヶ沢町議に当選3期務め、この間に議長に就任した。1971年、株式会社九重組代表に就任したが、1983年、県議に転じて当選6期務め、この間、2001年、議長に就

任した。富田は1986年、県水泳連盟会長、1988年、県体育協会副会長に就任、また自民党県連政調会長などを歴任した。1991年、鯨ヶ沢町特別功労賞を受賞し、1997年には、藍綬褒章を受章した（『青森県人名事典』〔東奥日報社、2002年〕、969頁）。

② 県議選での得票数

・1983年4月の県議選	15,456票（第一位）	自民党
・1987年4月の県議選	11,553票（第一位）	々
・1991年4月の県議選	12,310票（第二位）	々
・1995年4月の県議選	13,754票（第二位）	々
・1999年4月の県議選	無投票当選	々
・2003年4月の県議選	13,897票（第一位）	々
（平均得票数）	13,394票	

③ 横顔

富田重次郎は、鯨ヶ沢町出身である。県立木造高校卒。日本大学理工学部を中退。町議・議長を経て、県議に当選、県議会でも議長に就任した。父も町議会議長を務めた政治家一家である。自民党同僚議員の人物評は「温厚、実直、円満」。富田は尊敬する政治家として、田澤吉郎・故衆議院議員を挙げる。モットーは「常に目標を高く掲げ、努力を重ねる」。趣味は水泳とゴルフで、ゴルフはハンディ8の腕前である、という（「この人」『東奥日報』2001年12月19日、「きょうの顔」『陸奥新報』2001年12月19日）。

3. 神山久志

① 経歴

神山久志は1947年5月1日、東津軽郡蟹田町（現・外ヶ浜町）に生まれた。青森市立第一高等学校卒。1990年の県議補選で当選し、これを通算6

期務めた。この間、2001年には副議長に就任している（「この人」『東奥日報』2001年12月19日、「きょうの顔」『陸奥新報』2001年12月19日）。

## ② 県議選での得票数

・1990年3月の県議補選	9,738票（第一位）	無所属
・1991年4月の県議選	11,931票（第一位）	々
・1995年4月の県議選	9,436票（第一位）	自民党
・1999年4月の県議選	9,409票（第一位）	々
・2003年4月の県議選	10,308票（第一位）	無所属
・2007年4月の県議選	無投票当選	自民党
（平均得票数）	10,164票	

## ③ 横顔

神山久志は蟹田町出身である。青森市立第一高校卒。1990年3月の県議補選で当選し、6期務め、副議長に就任した。政治の道を志したきっかけは、「過疎に悩む上磯地域の生活を何とかしたい」という思いからだ、という。座右の銘は「上善水のごとし」。自分の性格について、「亥生まれだがおとなしいイノシシ」と分析する。趣味は野球とゴルフである（「きょうの顔」『陸奥新報』2001年12月19日、「この人」『東奥日報』2001年12月19日）。

## 4. おわりに

2001年12月の定例会では、県住宅供給公社の14億円横領事件が最大の焦点となった。しかし、その重要課題を抱えた中で議会を延長してまでの正副議長ポストの交代劇は、県民にとって見苦しい以外の何物でもなかった。従来のように、自民党は、単独過半数の“力”を盾に、「たらい回し」を強行し、そのため野党から厳しい批判を受けた（『東奥日報』2001年12月18日、『陸奥新報』2001年12月19日）。

## 第35章 副議長：小比類巻雅明（2002年9月10日，就任）

### <目次>

1. はじめに
2. 小比類巻雅明
3. おわりに

### 1. はじめに

副議長の神山久志は，県議会9月定例会の初日の2002年9月10日，蟹田町長選に出馬するため県議を辞職した。これに伴い副議長選挙が実施され，自民党所属で三沢市選出の当選4回を数える小比類巻雅明（63歳）が選出された（『県議会』『東奥年鑑 2004年版』〔東奥日報社，2003年〕，79頁）。

### 2. 小比類巻雅明

#### ① 経歴

小比類巻雅明は，1939年，三沢町に生まれた。日本大学経済学部卒。三沢市役所に勤務し，基地対策課長，企画部参事などを歴任した。1987年，県議に初当選し，5期務め，この間，2000年には，副議長に就任している。当選5回中，3回は無投票での当選である。小比類巻は自民党県連総務会長など歴任。2011年8月18日に死去，享年72であった（『この人』『東奥日報』2002年9月11日）。

#### ② 県議選での得票数

・1987年4月の県議選	11,653票（第一位）	自民党
・1991年4月の県議選	無投票当選	々
・1995年4月の県議選	無投票当選	々
・1999年4月の県議選	11,758票（第一位）	々
・2003年4月の県議選	無投票当選	々
（平均得票数）	11,700票	

## ③ 横顔

小比類巻雅明は三沢町出身である。日本大学経済学部卒後、三沢市役所に勤務した。課長、参事を経て、県議に当選した。父の富雄も市長を務めた「政治家一家」である。支持者にかつがれて政治の世界へ。小比類巻は、「一寒村だった三沢が市になったように、地域が発展していく。政治ぐらい面白いものはない」という。好きな言葉は「誠心誠意」で、特技は柔道で五段の腕前である。趣味は特にないが、休日に奥さんと山菜取りに出かけることだと語る（「この人」『東奥日報』2002年9月11日、「きょうの顔」『陸奥新報』2002年9月11日。「ひと人」『デーリー東北』2003年5月15日）。

## 3. おわりに

小比類巻雅明の副議長就任は、前副議長であった神山久志の辞職に伴う急な就任であって、しかも、2003年4月の県議選までの約7ヵ月という短期間の任期に過ぎない。この点について、小比類巻副議長は「選挙が控えているが選挙は選挙、仕事は仕事。支障のないように議会活動に意を用いていきたい。（任期が）短いどうのこうということはなく一生懸命にやるだけ」と語った（「この人」『東奥日報』2002年9月11日、「きょうの顔」『陸奥新報』2002年9月11日）。

## 第36章 議長：上野正蔵，副議長：小比類巻雅明（2003年5月14日，就任）

## &lt;目次&gt;

1. はじめに
2. 上野正蔵
3. 小比類巻雅明
4. おわりに

## 1. はじめに

2003年4月13日に県議選が行われ、無投票当選の3選挙区6人を加えた

新県議51人の顔ぶれが決まった。自民党は推薦を含めて21人が当選し、無所属5人を加えて26議席を確保、単独過半数を制した。一方、県民協会は8人当選の1議席減となった。最大の争点となった木村守男知事の女性問題に端を発し、知事不信任案に反対した自民党および無所属の5人は全員いずれも落選している。この他に、自民党と県民協会以外の当選者は、社民党1人、公明党2人、共産党2人、民主党2人、また無所属11人である(藤本一美『戦後青森県政治史 1945年～2015年』〔志學社、2016年〕、380頁)。

2003年5月14日、県議会臨時会―「組織会」が招集され、新しい議長に自民党で三戸郡選出の当選6回を数える上野正蔵(67歳)が、また副議長には、自民党で三沢市選出の当選5回の小比類巻雅明(64歳)が選出された。前章でも紹介したように、小比類巻は既に改選前に、副議長に選出されていた(『東奥日報』2003年5月15日)。

## 2. 上野正蔵

### ① 経歴

上野正蔵は1935年12月15日、三戸郡の階上村に生まれた。中央大学商学部卒。1963年、三戸郡社会福祉協議会理事、階上町社会福祉協議会常務理事を歴任した。1967年、階上村議に当選、連続4期務めた。この間、議長に就任している。1983年、県議に転身して当選、6期務め、2003年には議長に就任した。上野は、八戸地区農業改良普及事業協会副会長、階上町観光協会会長などを歴任した(『青森県議会史 自昭和58年～至昭和61年』〔青森県議会、1998年〕、1279頁)。

### ② 県議選での得票数

・1983年4月の県議選	13,024票(第三位)	自民党
・1987年4月の県議選	12,721票(第三位)	々
・1991年4月の県議選	12,721票(第二位)	々

・1995年4月の県議選	12,653票（第二位）	々
・1999年4月の県議選	12,696票（第二位）	々
・2003年4月の県議選	10,731票（第二位）	々
（平均得票数）	12,390票	

### ③ 横顔

上野正蔵は階上村出身である。中央大学商学部卒業後、実家で酪農を中心とした農業を継いだ。社会奉仕が一番大事だと民生委員を引き受ける一方、1967年、階上村議・町議に当選し、議長を務めた。その後、県議に転じて当選、連続6期当選。この間、2003年議長に就任している。上野のモットーは「和」で、趣味は「スポーツ」全般だそうだ。高校時代にソフトテニスで全国大会に出場した経験を有する（『東奥日報』2003年5月15日、『陸奥新報』2003年5月15日、「ひと人」『デーリー東北』2003年5月15日）。

## 3. 小比類巻雅明

（小比類巻については、前章の第35章で紹介したので略す）

## 4. おわりに

木村守男知事の女性問題に端を発した県政混乱の中で行われた県議選と正副議長の選出は、知事への政治的スタンスが問われることになった。特に、県議選では、知事直系の候補者、また不信任案に反対した候補者が落選するなど、県民の厳しい審判が下されたことを指摘しておきたい（『陸奥新報』2003年4月14日）。

## 第37章 議長：山内和夫，副議長：西谷洸（2004年6月25日，就任）

### <目次>

1. はじめに
2. 山内和夫
3. 西谷洸
4. おわりに

### 1. はじめに

県議会6月定例会の最終日である2004年6月25日，正副議長の選挙が実施され，議長には，自民党所属で青森市選出の当選7回を数える山内和夫（72歳）が，また副議長には，同じく自民党所属で弘前市選出の当選3回の西谷洸（59歳）が選ばれた。

2003年5月に議長に就任したばかりの上野正蔵は1年，また2002年9月に副議長に就任した小比類巻雅明も1年半で，「一身上の都合」を理由に正副議長を辞職した。そこで，新たに正副議長の選挙が行われた。今回の交代劇には，野党会派がポストの「たらい回し」だと反対を表明し，白票を投じた（『県議会』『東奥年鑑 2005年版』〔東奥日報社，2004年〕，79頁）。

### 2. 山内和夫

#### ① 経歴

山内和夫は1931年7月18日，青森市に生まれた。県立青森工業高校を経て，政治大学校卒。1951年，山内板金株式会社に勤務した。1963年，県連合青年団長に就任，1967年には，青森市議に当選，連続2期務めた。1975年，県議に転出，これを通算8期務めた（1983年に落選，1987年返り咲く）。1989年に副議長に，そして2004年には議長に就任している。山内は，自民党県連総務会長などを歴任し，1981年，県トランポリン協会会長，県環境衛生組合理事長などを務めた（『青森県人名事典』〔東奥日報社，2002年〕，1073頁，『青森県議会史 自昭和54年～至昭和57年』〔青森県議会，1996年〕，1304

頁)。

## ② 県議選での得票数

・1975年4月の県議選	11,731票 (第三位)	自民党
・1979年4月の県議選	12,548票 (第三位)	々
・1987年4月の県議選	16,245票 (第一位)	々
・1991年4月の県議選	13,929票 (第二位)	々
・1995年4月の県議選	12,788票 (第三位)	々
・1999年4月の県議選	11,643票 (第四位)	々
・2003年4月の県議選	11,994票 (第三位)	々
・2007年4月の県議選	11,373票 (第六位)	々
(平均得票数)	12,781票	

## ③ 横顔

山内和夫は青森市出身である。青森工業高校を経て、政治大学校卒。板金業を営む一方、青年団運動に参加した。青森市連合青年団長、県連合青年団長を務め、青森市議2期を経て、県議に当選、通算8期務め、副議長、議長に就任している。「まじめすぎる」とは自他ともに認める性格だ。山内は「政治に信頼を」が政治信条で、座右の銘は「誠実」であり、趣味は山歩き、読書、および美術鑑賞だという（「この人」『東奥日報』1989年3月21日、2004年6月26日、「きょうの顔」『陸奥新報』1989年3月21日、2004年6月26日）。

## 3. 西谷洸

### ① 経歴

西谷洸は、1945年、弘前市に生まれた。東京薬科大学薬学部卒。弘前青年会議所理事長などを歴任した。1991年、県議に初当選、通算5期務めた

(1999年に落選，2003年返り咲いた)。2004年に副議長に，2012年には議長に就任した(「この人」『東奥日報』2004年6月26日，「きょうの顔」『陸奥新報』2004年6月26日)。

### ② 県議選での得票数

・1991年4月の県議選	10,440票 (第三位)	無所属
・1995年4月の県議選	11,021票 (第二位)	自民党
・2003年4月の県議選	10,067票 (第五位)	々
・2007年4月の県議選	9,867票 (第六位)	々
・2011年4月の県議選	10,038票 (第二位)	々
(平均得票数)	10,287票	

### ③ 横顔

西谷冽は弘前市出身である。東京薬科大学薬学部卒。1991年，県議に初当選，副議長および議長を務めた。「青年会議所での活動に行き詰まり，政治の不合理的を感じ政治の世界へ飛び込んだ」という。西谷は185センチの長身で，「ダンディー」だと周囲の評判である。自身を「楽観的で目立ちたがり屋」と分析する。モットーは「優れた人は優しい人」。猫30匹と暮らすほどの猫好きである(「この人」『東奥日報』2004年6月26日，「きょうの顔」『陸奥新報』2004年6月26日)。

## 4. おわりに

既述のごとく，県議会では議長と副議長へのポスト就任には，与党会派(自民党)が任期4年を3人ずつで分けて務めるといふ，悪しき“慣習”が存在する。だから，2004年の正副議長の交代劇にしても，自民党のベテラン議員は「1年→1年半→1年半でポストを回す基本に沿った」だけだと語っていた。だが，それはまことに困った悪しき慣習であって，早急に

改善されるべきである（「新議長に山内和夫氏」『東奥日報』2004年6月26日）。

### 第38章 議長：成田一憲，副議長：滝沢求（2005年12月9日，就任）

<目次>

1. はじめに
2. 成田一憲
3. 滝沢求
4. おわりに

#### 1. はじめに

県議会12月定例会の最終日である2005年12月9日，正副議長の選挙が行われた。新しい議長には，自民党所属で北津軽郡選出の当選5回を数える成田一憲（66歳）が，また新副議長に，同じく自民党所属で八戸市選出の当選5回の滝沢求（47歳）が選ばれた。

この選挙は，現議長の山内和夫と副議長の西谷洸が「一身上の都合」を理由にわずか1年半での辞職に伴うものであって，自民党によるポスト「たらい回し」に対し，県民および野党から大きな批判を浴びたのは，いうまでもない（「県議会」『東奥年鑑 2007年版』〔東奥日報社，2006年〕，111頁）。

#### 2. 成田一憲

##### ① 経歴

成田一憲は1929年7月10日，北津軽郡中里町（現・中泊町）に生まれた。中里町立内湯中学卒。中里高校PTA会長，林業災害防止協会青森支部理事，青森営林局製品生産請負協議会理事など歴任した。1983年，県議に当選，通算8期務めた（1987年に落選，1991年返り咲く）。この間，2005年，議長に就任している（『青森県議会史 自昭和58年～至昭和61年』〔青森県議会，1998年〕，1279頁，「ひと人」『陸奥新報』2005年12月10日）。

## ② 県議選での得票数

・1983年4月の県議選	11,295票（第一位）	無所属
・1991年4月の県議選	11,085票（第二位）	々
・1995年4月の県議選	無投票当選	自民党
・1999年4月の県議選	9,226票（第三位）	々
・2003年4月の県議選	8,642票（第三位）	々
・2007年4月の県議選	11,455票（第二位）	々
・2011年4月の県議選	7,044票（第三位）	々
・2015年4月の県議選	7,306票（第三位）	々
（平均得票数）	10,874票	

## ③ 横顔

成田一憲は旧中里町出身である。中里町立内灘中学を卒業して、家業の農業、林業を継ぎ農家や労働者の苦労は身をもって知った。父は町議で、「町村議会と県議会の隔たりを常に感じた」ことが政治家を目指すきっかけとなった、という。成田は、何事も現場に赴き「自分の目で確かめる」のをモットーにしている。豪放磊落の一方で、人の話に親身で耳を傾ける繊細さも併せ持ち、県議32年の経験を有するベテランである（「この人」『東奥日報』2005年12月10日、「ひと人」『陸奥新報』2005年12月10日）。

## 3. 滝沢求

## ① 経歴

滝沢求は1958年10月11日、南部の八戸市に生まれた。県立八戸高校を経て、1981年、中央大学法学部を卒業した。元首相で中曽根康弘・衆議院議員の秘書を経て、1998年、県議選に初当選、連続4期当選した。この間、2005年、副議長に就任している。1995年、参議院通常選挙に無所属で出馬したが落選。しかし、県議での票をバックに2013年7月、参議院通常選挙に再

挑戦し、青森県選挙区より自民党公認で出馬、初当選を果たした。滝沢は、自民党県連政調会長などを歴任した。高校時代はアイスホッケーの選手として活躍し、国体に3年連続出場した経験を有する（「滝沢求」『青森県人名事典』〔東奥日報社、2002年〕、938頁、『青森県人物・人材情報リスト 2007』〔日外アソシエーツ、2006年〕、172頁、『デーリー東北』2013年7月22日、「この人」『東奥日報』2005年12月10日）。

## ② 県議選での得票数

・1999年4月の県議選	13,697票（第1位）	自民党
・2003年4月の県議選	11,428票（第3位）	々
・2007年4月の県議選	12,346票（第2位）	々
・2011年4月の県議選	12,159票（第2位）	々
（平均得票数）	12,408票	

## ③ 横顔

滝沢求は八戸市出身である。県立八戸高校を経て、中央大学法学部卒。元首相の中曽根康弘の秘書を経て、1998年、県議に当選、連続4期務め、2005年、副議長に就任した。その後、参議院議員に転出した。滝沢が政治家を目指した理由は、父の章次が元県議で副議長を務めたという政治家一家の環境、また中曽根元首相の秘書を務め「経験を故郷で生かしたい」、からだという。座右の銘は「千憂後楽」で、趣味はスポーツ観戦である（「ひと」『陸奥新報』2005年12月10日、「この人」『東奥日報』2005年12月10日）。

## 4. おわりに

正副議長の任期は、本来4年間であるはずだ。しかし遺憾なことに、実際には県議会で過半数を占める自民党が4年間に3人ずつ務める交代劇が常態化している。この点について、「議会の活性化につながる」と評価す

る声もある一方で、単なるポスト欲しさの「たらい回し」に過ぎず、「議員の任期と同じく4年間務めるべきである」との批判の声が根強い（「新議長に成田一憲」『東奥日報』2005年12月10日、「議長に成田氏選出」『陸奥新報』2005年12月10日）。

### 第39章 議長：神山久志，副議長：大見光男（2007年5月9日，就任）

#### <目次>

1. はじめに
2. 神山久志
3. 大見光男
4. おわりに

#### 1. はじめに

県議選が2007年4月8日に実施され、無投票で当選した黒石市、平川市、西津軽郡の5人を含む48人が決定した。今回、市町村合併や人口減少で選挙区割りが再編され、選挙区は1増（16区）、総定数は3減（48議席）の下で行われた。党派別当選者は、自民党24人、民主党6人、公明党2人、共産党2人、社民党1人、および無所属13人であった。だが、その後、自民党は無所属議員4人を入党させて28人とし、議会で過半数を制した（藤本一美『戦後青森県政治史 1945年～2015年』〔志學社、2016年〕、402頁）。

5月9日、県議会の臨時会―「組織会」が招集され、正副議長選挙が行われた。議長には、自民党で東津軽郡選出の当選6回を数える神山久志（60歳）を、また副議長には、同じく自民党でむつ市選出の当選3回の大見光男（76歳）を選んだ。

これまで、自民党の議長候補の要件は、①当選5回以上、②副議長経験者は8年以上の間隔を置く―という慣例であった。しかし、今回は対象者が少なかったこともあり、副議長を経験して5年に満たない神山久志を議長に選び、従来の慣例を見直す形となった（「県議会」『東奥年鑑 2008年

版』〔東奥日報社、2007年〕、103頁)。

## 2. 神山久志

### ① 経歴

神山久志は、1947年5月1日、東津軽郡蟹田町(現・外ヶ浜町)に生まれた。青森市立第一高等学校卒。蟹田町議を経て、1990年の県議補選で当選、通算6期務めた。この間、2001年に副議長に就任、また2007年には議長に就任した。神山は自民党県連議員総会長などを歴任した(『この人』『東奥日報』2001年12月19日、「きょうの顔」『陸奥新報』2001年12月19日)。

### ② 県議選での得票数

・1990年3月の県議補選	9,738票(第一位)	無所属
・1991年4月の県議選	11,931票(第一位)	々
・1995年4月の県議選	9,436票(第一位)	自民党
・1999年4月の県議選	9,409票(第一位)	々
・2003年4月の県議選	10,308票(第一位)	無所属
・2007年4月の県議選	無投票当選	自民党
(平均得票数)	10,164票	

### ③ 横顔

神山久志は、蟹田町(現・外ヶ浜町出身)である。青森市立第一高校卒。1990年3月の県議補選で当選、連続6期務め、副議長・議長に就任している。政治の道を志したきっかけは、「過疎に悩む上磯地域の生活を何とかした」という思からだ、と語る。神山のモットーは「自己主張する分の倍、人の話を聞く」という。座右の銘は「上善水のごとし」で、自分の性格については、「亥生まれだがおとなしいイノシシ」と分析する。趣味は、散歩、野球、ゴルフ。高校球児だったこともあり、野球は今も続けている

(「きょうの顔」『陸奥新報』2001年12月19日, 「この人」『東奥日報』2001年12月19日)。

### 3. 大見光男

#### ① 経歴

大見光男は1930年12月5日, 下北郡大間町に生まれた。日本大学経済学部を中退, 1952年, 日本海事新聞社入社した。1961年, 大見海水業に入社し, 1967年, 大見海事を創業した。1999年, 県議当選, 通算3期, この間, 2007年, 副議長に就任している。大見は, 海峡物産会長, 大見観光タクシー会社代表取締役, および大間町観光協会会長などを歴任した(『青森県人名事典』〔東奥日報社, 2002年〕, 938頁)。

#### ② 県議選での得票数

・1999年4月の県議選<下北郡>	6,591票 (第二位)	自民党	
・2003年4月の県議選	々	7,989票 (第一位)	々
・2007年4月の県議選<むつ市>	8,574票 (第三位)	々	
(平均得票数)	7,718票		

#### ③ 横顔

大見光男は大間町出身である。日本大学経済学部中退し, 民間会社の社長を経て, 1999年の県議に初当選, 連続3期務めた。2007年, 副議長に就任している。政治家になったきっかけは「周囲に勧められて」と控えめである一方, 「地域の人々と一緒に話しながら町起こしをするには, 政治家はいい」と語る。座右の銘は「天は人の上に人をつくらず, 人の下に人をつくらず」で, 常に「誠実」という言葉を忘れないようにしている, という。スキューバダイビングが趣味の行動派である(「この人」『東奥日報』2007年5月10日, 「ひと人」『陸奥新報』2007年5月10日)。

#### 4. おわりに

周知のように、県議会では、4年間の任期中に議長を3人で回すのが慣例化している。そこで、1年後に議長の交代が予想された。ただ、今回は「慣例」が撤廃された形となり、次期議長候補に山内崇議員が浮上し、そのため、自民党内部に火種を残す可能性が生じた（「党への貢献度優先—県議会自民議長候補選び」『東奥日報』2007年5月10日）。

### 第40章 議長：田中順造，副議長：清水悦郎（2008年12月10日，就任）

#### <目次>

1. はじめに
2. 田中順造
3. 清水悦郎
4. おわりに

#### 1. はじめに

県議会11月定例会の最終日の2008年12月10日、正副議長の選挙が行われ、新議長に自民党で十和田市選出の当選5回の田中順造（58歳）が、また新副議長には、同じく自民党で八戸市選出の当選3回の清水悦郎（59歳）が選ばれた。

議長の神山久志と副議長の大見光男が共に、「一身上の都合」の理由を挙げて正副議長を辞任した。任期途中の1年半でもって退いたことを受けての正副議長選挙について、県民および野党から単なる「ポストのたらい回し」であると、強い批判を受けたのはいうまでもない（「県議会」『東奥年鑑 2010年版』〔東奥日報社，2009年〕，71頁）。

#### 2. 田中順造

##### ① 経歴

田中順造は1950年3月17日、十和田町に生まれた。県立七戸高校を経て、

足利工業大学工学部の建築学科を卒業した。1972年、田中建設株式会社に入社し、1981年、同社常務取締役役に就任した。1991年、県議初当選、通算6期務めた（2003年落選、2007年に返り咲く）。2008年には、議長に就任している。田中は、十和田青年会議所理事長などを歴任し、また一級建築士の資格を有する（『青森県人名事典』〔東奥日報社、2002年〕、947頁、「ひと」『デーリー東北』2008年12月11日）。

### ② 県議選での得票数

・1991年4月の県議選	10,439票（第二位）	無所属
・1995年4月の県議選	無投票当選	々
・1999年4月の県議選	10,734票（第二位）	々
・2007年4月の県議選	11,535票（第一位）	自民党
・2011年4月の県議選	無投票当選	々
・2015年4月の県議選	9,783票（第二位）	々
（平均得票数）	10,623票	

### ③ 横顔

田中順造は十和田町出身である。県立七戸高校を経て、足利工業大学工学部卒。会社勤務を経て1991年、県議に初当選し、通算6期務めた。2003年には落選したものの、2007年、再起して当選した。その後、2008年、議長に就任している。6回当選の中で、2回が無投票当選であった。「温厚な人柄」だと同僚議員は口をそろえて評価する。田中は、はったりを好まず、物静で、議場でヤジを飛ばすことはない、というが、議会運営では手腕をふるう。西郷隆盛の「敬天愛人」が座右の銘で、一級建築士の資格を有し、趣味は全国各地を旅行しながら「全国の建物を見て歩く」ことだそうだ（「この人」『東奥日報』2008年12月11日、「ひと人」『陸奥新報』2008年12月11日、「ひと」『デーリー東北』2008年12月11日）。

### 3. 清水悦郎

#### ① 経歴

清水悦郎は1949年、八戸市に生まれた。國學院大學法学部卒。小泉純一郎元首相の私設秘書を務め政治家修行をした。その後、八戸市議を3期、副議長に就任している。1999年、県議に転出して当選。これを5期務め、2008年、副議長に就任した。また7年後の2015年には、議長に就任している。清水は高校時代、レスリング選手として国体に出場し、県レスリング協会理事などを務めた（「この人」『東奥日報』2008年12月11日、「ひと人」『陸奥新報』2008年12月11日）。

#### ② 県議選での獲得票数

・1999年4月の県議選	9,996票（第八位）	自民党
・2003年4月の県議選	7,224票（第八位）	々
・2007年4月の県議選	7,843票（第八位）	々
・2011年4月の県議選	8,112票（第七位）	々
・2015年4月の県議選	8,690票（第五位）	々
（平均得票数）	8,373票	

#### ③ 横顔

清水悦郎は八戸市出身である。國學院大學法学部卒。八戸市議を経て、県議に当選、これを5期務め、この間、副議長および議長に就任している。最下位当選が3回と苦しい選挙を体験した。清水は大学生時代、旧日本兵の遺骨収集ボランティアに参加し「自分は何をなすべきか」と考え、政治家を目指したという。趣味はソフトボールと野球で、高校時代レスリングで国体に出場したスポーツマンである（「ひと人」『陸奥新報』2008年12月11日、「この人」『東奥日報』2008年12月11日、「ひと」『デーリー東北』2008年12月11日）。

#### 4. おわりに

既に述べたように、今回もまた、自民党が“慣行”とする正副議長交代が行われた。しかし、大きな混乱もなく議長に田中順造、また副議長には清水悦郎が選出された。議長に就任した田中順造は、次のように抱負を語った。「県民の目線に立ち、円滑な議会運営に誠心誠意努める」「少数会派の議員の意見にも耳を傾けていく」。

一方、副議長に就任した清水悦郎は、次のように述べた。「本県発展のために一生懸命頑張りたい。県民の方々に分かりやすい議会運営に努めていきたい」（「県会議長に田中氏」『陸奥新報』2008年12月11日、「この人」『東奥日報』2008年12月11日）。

毎回のよう、正副議長のポストを1期4年で3人ずつ回す自民党に対して、野党からは「ポストのたらい回しだ」「議会の信頼を損ねる行為」などの批判が噴出したものの、まったく改善の見込みはゼロに近いのは遺憾である（「青森県議会議長に田中氏選出」『デーリー東北』2008年12月11日）。

### 第41章 議長：長尾忠行，副議長：中谷純逸（2010年3月24日，就任）

#### <目次>

1. はじめに
2. 長尾忠行
3. 中谷純逸
4. おわりに

#### 1. はじめに

2010年3月24日、県議会の2月定例会は最終日を迎え、正副議長選挙が行われた。新議長には、自民党で平川市選出の当選4回を数える長尾忠行（61歳）が、また副議長には、同じく自民党で上北郡選出の当選3回の中谷純逸（60歳）が選ばれた。

当然のことながら、野党からは「ポストのたらい回しで、県民の理解が

得られない」と批判の声が上がったものの、自民党側は「交代は既定路線」との方針を崩さず、粛々と手続きを進めた。これに対して、野党のみならず識者からも「議会運営が形骸化している一つの象徴だ」と厳しい批判を受けた（「新議長に長尾氏」『東奥日報』2010年3月25日）。

## 2. 長尾忠行

### ① 経歴

長尾忠行は1949年3月10日、竹館村（現・平川市）に生まれた。東京農業大学農学部農学科卒。本業はリンゴ農家である。平賀町議、平川市議を経て、1998年、県議補欠選で初当選、通算5期務め、2010年、議長に就任している。長尾は自民党県連政調会長などを歴任し、2011年には、平川市長選に出馬して初当選、また2015年に再選された（この人『東奥日報』2010年3月25日）。

### ② 県議選での得票数

・1998年4月の県議補選<南津軽郡>	12,255票（第二位）	自民党
・1999年4月の県議選	10,931票（第四位）	々
・2003年4月の県議選	12,129票（第一位）	々
・2007年4月の県議選	無投票当選	々
・2011年4月の県議選<平川市>	9,789票（第一位）	々
（平均得票数）	11,276票	

### ③ 横顔

長尾忠行は竹館村出身である。東京農大卒。平賀町議、平川市議を経て、県議に当選した。県議を連続5期務め、2010年、議長に就任している。2011年には、平川市長選に転じて当選、現在2期目である。長尾は、青年団や公民館活動を皮切りに政治への道を歩み始めた。高校まで陸上とバスケッ

トに打ちこんだ。趣味は読書と野球で、県議会きっての美声の持ち主だという（「この人」『東奥日報』2010年3月25日、「ひと人」『陸奥新報』2010年3月25日）。

### 3. 中谷純逸

#### ① 経歴

中谷純逸は1949年8月16日、野辺地町に生まれた。県立青森高校を経て、中央大学商学部を中退した。野辺地町商工会副会長、同町議を経て、1990年、県議に初当選、通算3期務め、この間、2010年、副議長に就任している。亡くなった父の中谷権太も県議を3期務めた「政治家一家」である。中谷は県石油商業協会理事などを歴任した（『青森県人名事典』〔東奥日報社、2002年〕、982頁、「この人」『東奥日報』2010年3月25日、「ひと人」『陸奥新報』2010年3月25日）。

#### ② 県議選での得票数

・1999年4月の県議選	11,493票（第三位）	無所属
・2003年4月の県議選	無投票当選	自民党
・2007年4月の県議選	11,293票（第一位）	々
（平均得票数）	11,393票	

#### ③ 横顔

中谷純逸は野辺地町出身である。県立青森高校卒、中央大学商学部中退。野辺地町議を経て、県議に当選。副議長に就任した。中谷は父の背中を追って政治の世界に入った。商工会議所の青年部での活動が政治活動の原点で、座右の銘は「信なくば立たず」。畑で花を育てるが気晴らしである、という（「ひと人」『陸奥新報』2010年3月25日、「この人」『東奥日報』2010年3月25日）。

#### 4. おわりに

冒頭でも述べたように、県議会の2月定例会の最終日、最大会派の自民党の慣例で正副議長が交代した。繰り返されるポストのたらい回しについて、野党は「地域主権の時代にあって議長の職責が増す中で、いつまで続けるのか」とあきれ顔だ。一方、与党内部でも慣例の見直しを訴える声が強まっている、という（「与党にも見直しの声」『陸奥新報』2010年3月25日）。

こうした状況について、弘前学院大学の西東克介・准教授は、次のように批判している。「良い政策や条例づくり、行政の監視など議会の役割を本当に発揮していくには大変な時間と労力がかかる。（交代の繰り返しては）議長が本来のリーダーシップを発揮できない」（『批判の中 既定路線』『東奥日報』2010年3月25日）。

### 第42章 議長：高極憲，副議長：相川正光（2011年5月11日，就任）

#### <目次>

1. はじめに
2. 高極憲
3. 相川正光
4. おわりに

#### 1. はじめに

2011年3月11日、戦後最大級の地震が三陸沖で発生し、八戸市など本県を含む東北・関東地方の太平洋沿岸に巨大津波が押し寄せた。政府はこれを「東日本大震災」と命名した。青森県内でも、津波で沿岸部を中心に大きな被害が生じ、死者は三沢市2人、八戸市1人、負傷者は47人で、地震と津波による被害総額は1千億円を超えた。

こうした状況の中で、県議選が4月10日に行われ、無投票の7選挙区8人を含む新県議48人が確定。当選者は、自民党25人、民主党6人、公明党2人、共産党2人、および無所属13人で、新県議の新旧別では、現職33人、

元職3人，新人12人。この中で女性が3人。その後，自民党は無所属から5人を入党させ，30議席とした（藤本一美『戦後青森県政治史 1945年～2015年』〔志學社，2016年〕，第三部第17章）。

県議会は5月11日，改選後の「組織会」となる臨時議会を招集，正副議長の選挙を行った。新議長には，自民党で黒石市選出の当選5回を数える高樋憲（53歳）を，また副議長には，同じく自民党で北津軽郡選出の当選3回の相川正光（57歳）を選んだ（「県議会」『東奥年鑑 2012年版』〔東奥日報社，2011年〕，73頁）。

## 2. 高樋憲

### ① 経歴

高樋憲は1958年5月3日，黒石市に生まれた。日本大学生産工学部土木工学科卒。1995年，県議に初当選。1998年には，黒石市長選挙に出馬したが，鳴海広道に敗れ落選を喫した。1999年の県議選で県議に返り咲き，通算5期務めた。この間，2011年には，議長に就任している。高樋は自民党県連副会長などを歴任し，2014年，黒石市長選に再出馬，無投票で初当選した。2018年も無投票で再選されている。祖父の高樋竹次郎も黒石市長を務めた「政治家一家」である（「この人」『東奥日報』2011年5月12日，「ひとり」『陸奥新報』2011年5月12日）。

### ② 県議選での得票数

・1995年4月の県議選	12,928票（第一位）	無所属
・1999年4月の県議選	14,185票（第一位）	々
・2003年4月の県議選	無投票当選	自民党
・2007年4月の県議選	無投票当選	々
・2011年4月の県議選	無投票当選	々
（平均得票数）	13,557票	

## ③ 横顔

高樋憲は黒石市出身である。日本大学生産工学部卒。1995年、県議初当選。連続5期務め、議長に就任した。その後、黒石市長選に転出して当選。現在2期目である。県議選、市長選で無投票当選が多いのが目につく。名市長の誉れが高い祖父・竹次郎の名前が浸透しているからであろう。高樋は「自分はばか正直。損得ではなく善意でものを考えたい」と信念を語る。自党内でも有数の論客である。バイクの免許を取得し、400ccのバイクでツーリングを楽しんでいる（「ひと人」『陸奥新報』2011年5月12日、「この人」『東奥日報』2011年5月12日）。

## 3. 相川正光

## ① 経歴

相川正光は1953年10月29日、鶴田町に生まれた。県立五所川原農林高校卒。卒業後は青森県連合青年団団長など青年団活動に従事した。1984年、鶴田町議に当選し、2000年、副議長に就任した。2002年、町議5期目の途中で鶴田町収入役に選任され、2003年には県議に転じて初当選、通算3期務め、この間、2011年、副議長に就任している。また、2014年には、鶴田町長選に出馬して当選。2018年に再選された（「ひと人」『陸奥新報』2011年5月12日、「この人」『東奥日報』2011年5月12日）。

## ② 県議選での得票数

・2003年4月の県議選	8,584票（第三位）	無所属
・2007年4月の県議選	9,882票（第一位）	自民党
・2011年4月の県議選	無投票当選	々
（平均得票数）	9,233票	

③ 横顔

相川正光は鶴田町出身である。五所川原農林高校卒業後、実家の農業を手伝いながら青年団活動に参加した。鶴田町議に当選して18年間務め、副議長に就任している。政治を続ける動機は、「地域に住む人たちの生活を向上させたいとの願いからだ」という。相川は自分の性格を「何事にも誠実に取り組む」と分析する。座右の銘は「誠心誠意」で、趣味は野球のテレビ観戦である（「ひと人」『陸奥新報』2011年5月12日、「この人」『東奥日報』2011年5月12日）。

4. おわりに

本論の冒頭でも述べたように、自民党は、県議選後に無所属から5人を入党させ、定数48中30議席を獲得し、第二会派の民主党の6議席を大きく引き離し第一会派を維持することに成功した。そのため、自民党は正副議長職のみならず、6つの常任委員会と特別委員会の正副委員長の職をすべて独占した（「自民30議席 近年最多」『東奥日報』2011年5月12日）。

第43章 議長：西谷洸，副議長：森内之保留（2012年6月29日，就任）

<目次>

1. はじめに
2. 西谷洸
3. 森内之保留
4. おわりに

1. はじめに

県議会6月定例会の最終日の2012年6月29日、自民党による正副議長の交代劇が行われた。本会議で新議長には、自民党所属で弘前市選出の当選6回の西谷洸（67歳）が、また新副議長には、同じく自民党所属で青森市選出の当選4回を数える森内之保留（47歳）が選ばれた。前任の正副議長

が共に、「一身上の都合」を理由にして任期途中で辞職したからだ。昨年5月の改選後の臨時議会からわずか1年余りでの交代劇については、当然のごとく野党から、単なる「肩書欲しさの“たらい回し”」に過ぎないと、強い批判が寄せられた（「県議会議長に西谷氏」『東奥日報』2012年6月30日）。

## 2. 西谷 洸

### ① 経歴

西谷洸は1945年、弘前市に生まれた。県立弘前高校を経て、東京薬科大学薬学部卒。弘前青年会議所理事長などを歴任した。1991年、県議に初当選、通算5期務めた（1999年落選、2003年に返り咲く）。この間、2004年に副議長に、2012年には議長に就任している。西谷は学校法人弘前厚生学院理事長などを歴任した（「この人」『東奥日報』2004年6月26日、「ひと人」『陸奥新報』2004年6月26日）。

### ② 県議選での得票数

・1991年4月の県議選	10,440票（第三位）	無所属
・1995年4月の県議選	11,021票（第二位）	自民党
・2003年4月の県議選	10,067票（第五位）	々
・2007年4月の県議選	9,867票（第六位）	々
・2011年4月の県議選	10,038票（第二位）	々
・2015年4月の県議選	10,756票（第二位）	々
（平均得票数）	10,756票	

### ③ 横顔

西谷洸は弘前市出身である。東京薬科大学薬学部卒。1991年、県議に初当選、副議長および議長を務めた。「青年会議所での活動に行き詰まり、政治の不合理的を感じ政治の世界へ飛び込んだ」という。西谷は185センチ

の長身で、「ダンディー」だと周囲の評判である。自身を「楽観的で目立ちたがり屋」と分析する。モットーは「優れた人は優しい人」で、趣味は芸術鑑賞である。猫30匹と暮らしている程猫好きである（「この人」『東奥日報』2004年6月26日、「ひと人」『陸奥新報』2004年6月26日）。

### 3. 森内之保留

#### ① 経歴

森内之保留は、1964年青森市に生まれた。県立青森東高校卒。法政大学文学部史学科通信課程を中退した。青森地域広域消防事務組合に勤務した後、株式会社森内畜産専務取締役就任した。1999年、県議に初当選、通算5期務めた。この間、2012年、副議長に就任している。父の森内勇も県議5期、外ヶ浜町長も務めた「政治家一家」だ。森内之は県サイクリング協会会長、県ロッククライミング協会会長などを歴任した（『森内之保留』ホームページ、「ひと人」『陸奥新報』2012年6月30日、「この人」『東奥日報』2012年6月30日）。

#### ② 県議選での得票数

・1999年4月の県議選	9,885票（第六位）	無所属
・2003年4月の県議選	10,231票（第九位）	々
・2007年4月の県議選	11,502票（第五位）	自民党
・2011年4月の県議選	11,454票（第二位）	々
・2015年4月の県議選	10,756票（第四位）	々
（平均得票数）	10,766票	

#### ③ 横顔

森内之保留は青森市出身である。青森東高校卒、法政大学文学部史学科通信課程を中退した。約10年間、消防職員勤務を経て政治の世界へ入った。

1999年に県議に当選以来、議会で一貫して雪対策の必要性を訴えてきた。自分の性格分析を「頑固で短気」だという。趣味は野球観戦で、スポーツはアイスホッケー、自転車、バレーボールなど、スポーツへの関心が高い。好きな言葉は「鵬程万里」「確乎不拔」で、料理も得意であるという（『森内之保留』ホームページ、「ひと人」『陸奥新報』2012年6月30日、「この人」『東奥日報』2012年6月30日）。

#### 4. おわりに

冒頭でも述べたように、県議会6月定例会の最終日である6月29日、自民党による正副議長の交代劇が展開された。自民党内では、「一人でも多くの議員が見識を高めるため」などと擁護する一方で、「1年余りは短すぎる」と批判する声が聞かれた。

短期の正副議長交代について、野党からは「単なる肩書欲しさのたらい回し」であり、「悪しき慣習」に過ぎないと再三再四批判されてきた。こうした悪しき慣習は、改めるに越したことがない（「交代早すぎるの批判」『陸奥新報』2012年6月30日）。

### 第44章 議長：阿部広悦，副議長：越前陽悦（2013年12月9日，就任）

#### <目次>

1. はじめに
2. 阿部広悦
3. 越前陽悦
4. おわりに

#### 1. はじめに

県議会定例会は2013年12月9日、本会議を開催し、議長の西谷洸と副議長の森内之保留が「一身上の都合」を理由に正副議長を辞職したので、正副議長の選挙を行った。その結果、新議長には、自民党で南津軽郡選出の

当選5回を数える阿部広悦（65歳）が、また新副議長には、同じく自民党でむつ市選出の当選4回の越前陽悦（68歳）が選ばれた。

県議会で過半数を占めてきた自民党は、これまで4年任期の正副議長のポストを3人で回すのを「慣習」としており、野党サイドから「たらい回し」に過ぎない、と強い批判を浴びてきた。しかし、遺憾なことに改善する動きはまったく見当たらず、感覚がマヘしているのだろう（「県議会」『東奥年鑑 2015年版』〔東奥日報社、2014年〕、67頁）。

## 2. 阿部広悦

### ① 経歴

阿部広悦は1947年1月18日、南津軽郡藤崎町に生まれた。県立五所川原工業高校卒。木村守男・衆議院議員の秘書を経て、藤崎町議を4期務め、同議長に就任している。1998年の県議補欠選で県議に転身して当選、通算6期務め、この間、2013年、議長に就任した。阿部は議会運営委員長などを歴任した（「ひと人」『陸奥新報』2013年12月10日、「この人」『東奥日報』2013年12月10日）。

### ② 県議選での得票数

・1998年4月の県議補選	14,266票（第一位）	無所属
・1999年4月の県議選	13,386票（第一位）	々
・2003年4月の県議選	9,990票（第二位）	自民党
・2007年4月の県議選	7,324票（第一位）	々
・2011年4月の県議選	6,088票（第一位）	々
・2015年4月の県議選	無投票当選	々
（平均得票数）	10,210票	

## ③ 横顔

阿部広悦は藤崎町出身である。県立五所川原工業高校卒。藤崎町議，議長を経て，県議に当選，これを6期務め，2013年，議長に就任した。町議，県議合せて議員生活35年のベテランで，元知事の木村守男派の大番頭でもある。阿部は「弱者救済」が自身の原点だと語る。座右の銘は「信なくば立たず」で，ドライブが趣味だという（「ひと人」『陸奥新報』2013年12月10日，「この人」『東奥日報』2013年12月10日）。

## 3. 越前陽悦

## ① 経歴

越前陽悦は1945年7月12日，むつ市に生まれた。県立大湊高校卒。都内の医療機器販売会社に勤務した。その後，むつ市に戻り，国鉄バスの運転手を務めた。むつ市議5期を経て，1999年，県議に転身して当選，通算5期務めた。この間，2013年，副議長に就任している（「ひと人」『陸奥新報』2013年12月10日，「この人」『東奥日報』2013年12月10日）。

## ② 県議選での得票数

・1999年4月の県議選	8,640票（第二位）	無所属
・2003年4月の県議選	8,162票（第二位）	々
・2007年4月の県議選	13,116票（第一位）	々
・2011年4月の県議選	9,574票（第三位）	々
・2015年4月の県議選	10,676票（第一位）	自民党
（平均得票数）	10,034票	

## ③ 横顔

越前陽悦はむつ市出身である。大湊高校卒。国鉄のバス運転手を経て，むつ市議5期，県議5期と政治生活は長い。運転手時代，乗客のために尽

力し、乗客の後押しで政治家の道へ入った。越前は忍耐と努力が信条で息抜きは音楽だ、という。トロンボーやドラムも操り、趣味は音楽鑑賞だと語る（「ひと人」『陸奥新報』2013年12月10日、「この人」『東奥日報』2013年12月10日）。

#### 4. おわりに

2011年4月の県議選後、正副議長の交代は今回が2度目で、1年半の在職となった。4年の任期が全うされないことについて、無所属の古村一雄は「議会改革の一環として議会基本条例を制定したのに、何も変わっていない。条例の精神が全く反映されていない」と批判する。まったくその通りであって、繰り返していうようだが、悪しき慣習は早急に改めるべきだ（「県会議長に阿部氏一任期途中で交代」『東奥日報』2013年12月10日）。

### 第45章 議長：清水悦郎，副議長：工藤兼光（2015年5月13日，就任）

#### <目次>

1. はじめに
2. 清水悦郎
3. 工藤兼光
4. おわりに

#### 1. はじめに

統一地方選の前半を飾る県議会議員選挙が、2015年4月12日に行われ、無投票となった5選挙区を除く11選挙区的全議席が確定した。当選者は、自民党29人、民主党6人、公明党2人、共産党2人、そして無所属9人であった。自民党は、無投票当選者を含めて公認した29議席を獲得、現有議席を1つ減らしたものの、引き続き安定多数を維持した。社民党は議席奪還が成らなかった

県議選後初の臨時会—「組織会」が5月13日に開催し、正副議長選挙が

行われた。新議長には、自民党で八戸市選出の当選5回を数える清水悦郎（65歳）が、また副議長には、同じく自民党で西津軽郡選出の当選4回の工藤兼光（71歳）が選ばれた。なお、八戸市からの議長選出は、1997年まで議長を務めた高橋長次郎以来18年ぶりである。

議長就任の記者会見で清水は「慎重かつ機動力をもって改革を推進したい」と述べ、政務活動費や議会改革に関する議論に意欲を見せた一方で、正副議長が任期途中で交代する慣例について、清水は「まず一生懸命頑張りたい」と、また副議長の工藤は「4年だと思っている」と答えた（「県議会議長の清水氏―副議長 工藤兼氏が就任」『東奥日報』2015年5月14日、「青森県議会議長の清水氏」『デーリー東北』2015年5月14日）。

## 2. 清水悦郎

### ① 経歴

清水悦郎は1949年5月30日、八戸市に生まれた。國學院大學法学部卒。小泉純一郎元首相の私設秘書を経て八戸市議を3期務め、その後、1999年、県議に転出して当選。これを5期務め、2008年、副議長に就任している。また、7年後の2015年には、議長に就任した。清水は現在、県議5期目である。高校時代、レスリング選手として国体に出場し、県レスリング協会理事などを務めた（「この人」『東奥日報』2008年12月11日、「ひと人」『陸奥新報』2008年12月11日）。

### ② 県議選での獲得票数

・1999年4月の県議選	9,996票（第八位）	自民党
・2003年4月の県議選	7,224票（第八位）	々
・2007年4月の県議選	7,843票（第八位）	々
・2011年4月の県議選	8,112票（第七位）	々
・2015年4月の県議選	8,690票（第五位）	々

(平均得票数) 8,373票

## ③ 横顔

清水悦郎は八戸市出身である。國學院大學法学部卒。八戸市議を経て、県議に当選、これを5期務め、この間、副議長および議長に就任した。最下位当選が3回と苦しい選挙を経験している。清水は大学生時代、旧日本兵の遺骨収集ボランティアに参加し「自分は何をなすべきか」と考え、政治家を目指した、という。一見すると“こわおもて”だが、気さくな性格と誠実さは同僚議員の誰もが認める。座右の銘は「信なくば立たず」で、趣味はレスリングと野球である。高校時代レスリングで国体に出場し、県大会では3位の実力者でスポーツマンだ（「ひと人」『陸奥新報』2008年12月11日、2015年5月14日、「この人」『東奥日報』2008年12月11日、2015年5月14日、「ひと」『デーリー東北』2015年5月14日）。

## 3. 工藤兼光

## ① 経歴

工藤兼光は1943年8月12日、西津軽郡鰺ヶ沢町に生まれた。長平中学校卒。家業のコメづくりに専念してきた。鰺ヶ沢町議を経て、2003年県議に転身して当選。4期務め、その間、2015年、副議長に就任している。工藤は農林水産委員長などを歴任した（「この人」『東奥日報』2015年5月14日、「ひと」『陸奥新報』2015年5月14日）。

## ② 県議選での得票数

・2003年4月の県議選	8,996票（第三位）	無所属
・2007年4月の県議選	無投票当選	自民党
・2011年4月の県議選	無投票当選	々
・2015年4月の県議選	無投票当選	々

(平均得票数) 8,996票

### ③ 横顔

工藤兼光は鱒ヶ沢出身である。中学卒業後、家業のコメづくりに専念し、首都圏で出稼ぎにも従事した。農業を営み政治は「公平、公正でないことがある」と感じたのが政治家への道を志す契機となった。鱒ヶ沢町議を経て、2003年県議に転身して当選。2007年から連続3期無投票当選を果たした。政治家としての信条は「今できることを明日に延ばすな」で、趣味はカラオケである、という（「この人」『東奥日報』2015年5月14日）。

## 4. おわりに

臨時県議会の正副議長選挙は、2015年5月13日に実施された。だが、これまでとは異なる投票行動が見られた。民主党に所属する6人が、議長選挙で自民党の清水悦朗に、そして副議長選挙では、自派の北紀一に投票したのだ。記者の取材に対して、北議員は「第一会派が議長、第二会派が副議長（を出す）という国会や各地方自治体の慣習に倣ったもので、極めて常識的な対応だ」と説明した。だが、改選前の任期中に実施された3回の議長選では、民主党は自派候補を擁立するか無効票を投じており、自民党議員に投票したことはなかった。この点について、自民党議員は「驚いた」とつぶやいた（「投票行動に変化」『東奥日報』2015年5月14日、「議長選民主全員清水氏に投票」『デーリー東北』2015年5月14日）。

## 第46章 議長：熊谷雄一，副議長：山谷清文（2017年3月22日，就任）

### <目次>

1. はじめに
2. 熊谷雄一
3. 山谷清文
4. おわりに

### 1. はじめに

県議会定例会は2017年3月22日に本会議を開催し，正副議長の選挙を行った。新議長に，自民党で八戸市選出の当選4回の熊谷雄一（54歳）が，また副議長に，同じく自民党で青森市選出の当選3回の山谷清文（59歳）が選ばれた。これは2015年5月に就任した議長の清水悦郎と副議長の工藤兼光がそれぞれ，「一身上の都合」を理由に正副議長を辞任したことに伴う措置である。従来，自民党は4年任期中に議長ポストを3人で回してきたものの，この慣例を見直す形となった。議長の2年交代は1989年以来，実に28年ぶりのことだ。また，八戸市選出の議員が議長を務めるのは，清水悦郎から2代連続となる（「政治・県議会」『東奥年鑑 2018年版』〔東奥日報社，2017年〕，36頁，「熊谷氏が議長就任」『デーリー東北』2017年3月23日）。

### 2. 熊谷雄一

#### ① 経歴

熊谷雄一は1962年9月7日に八戸市に生まれた。八戸工大二高校を経て，日本大学法学部政治経済学科卒。2001年，八戸市議初当選。2003年，県議に転身して，連続4回当選した。この間，2017年，議長に就任している。熊谷は，議会運営委員長，自由民主党青森県連副会長，県自転車競技連盟会長，県防具付空手道連盟会長，および八戸市空手道連盟会長などを歴任した。祖父の義雄も衆議院議員であり，「政治家一家」である（「ひと」『陸奥新報』2017年3月23日，「この人」『東奥日報』2017年3月23日）。

## ② 県議選での得票数

・2003年4月の県議選	7,346票（第七位）	自民党
・2007年4月の県議選	10,198票（第四位）	々
・2011年4月の県議選	13,125票（第一位）	々
・2015年4月の県議選	14,718票（第一位）	々
（平均得票数）	11,347票	

## ③ 横顔

熊谷雄一は、八戸市出身である。八戸工大二高校を経て、日本大学法学部卒。39歳で八戸市議に当選した。その後県議に転身、4回連続当選。現在議長を務めている。祖父は元衆議院議員の熊谷義雄、また叔父は元八戸みなと漁港組合長の熊谷拓治で「ハマの熊谷」の系譜を継ぐ。熊谷は物腰が柔らかく、敵をつくらぬ性格だと周囲の評判である。「一日一日を大切に積み重ねたい」と語る。座右の銘は「民心なくば立たず」で、学生時代からバンドを組んでいたほど音楽好きだ。今もシャンソンなどのレッスンを受けている、という（「この人」『東奥日報』2017年3月23日、「ひと人」『陸奥新報』2017年3月23日、「ひと」『デーリー東北』2017年3月23日）。

## 3. 山谷清文

## ① 経歴

山谷清文は1957年10月11日、青森市に生まれた。県立青森高校を経て、中央大学法学部卒。大成建設（株）の社員となった。1990年、青森市議に初当選、2期務めた。2003年、県議に転じて当選、通算3期務めた（2007年落選、2011年に返り咲く）。この間2017年、副議長に就任している。山谷は、自民党県連政務調査副会長、県熟年野球協会会長、県ターゲットバードゴルフ協会会長などを歴任した（『山谷清文』ホームページ、「ひと人」『陸奥新報』2017年3月23日、「この人」『東奥日報』2017年3月23日）。

② 県議選での得票数

・2003年4月の県議選	10,357票（第七位）	無所属
・2011年4月の県議選	7,921票（第七位）	自民党
・2015年4月の県議選	7,577票（第十位）	々
（平均得票数）	8,618票	

③ 横顔

山谷清文は青森市出身である。県立青森高校を経て、中央大学法学部卒。青森市議を経て、県議当選。県議選には計6回挑戦し、3度落選の憂き目を見た。父の清作も県議4期務めた「政治家一家」である。山谷の信条は「義理と人情」で、座右の銘は「堅忍不拔である」。尊敬する人物は元知事の津島文治だという。趣味は、野球観戦、ペン習字（『山谷清文』ホームページ、「この人」『東奥日報』2017年3月23日、「ひと人」『陸奥新報』2017年3月23日）。

4. おわりに

冒頭でも述べたように、県議会の正副議長のポストはこれまで4年の任期の間に、3人が正副議長を務めることがほぼ慣例化していた。しかし、今回、自民党は任期を2年交代で2人が担当する形に見直す、という。遅きに帰したといえるが、議会改革の一環として、まずは2年交代体制が定着することを望みたい。正副議長ポストは“名誉職”的色彩が濃く、度重なる任期途中での交代には批判の声が上がっていたからである（『陸奥新報』2017年3月23日、「熊谷氏が議長就任」『デーリー東北』2017年3月23日）。

## 結 び

県議会の議長は、議会の代表であって、議会のいわば“象徴的”存在である。それだけに、選出には、候補者の識見、人格、および経験を最大限に重視し、同僚議員の信頼に基づいて行われるのが肝要である。

県議会の議長・副議長の任期は、地方自治法で謳われているように、本来4年間であるはずである。ただ、議長職や副議長職は、かなり激職であるので、私は個人的には、2年間でも良いとは思っている。

しかし、本論の中でも紹介したように、4年任期を最初は1年、残りの3年を1年半ずつ担当して、4年間に3人も議長や副議長を輩出する「密約」はいかがなものかと疑問を感じざるを得ない。

さらに、議長を議会で多数派を占める第一党=与党から出すのは理解できるとしても、副議長は野党第一党に回すような配慮が必要であろう。自民党の場合、当選4ないし5回で議長職が、また当選2回ないし3回で副議長職が回ってくる。問題なのは、正副議長の選出に際し、津軽と南部といった地域対立、国会議員の派閥争い、および利権・利害関係が絡み、選出過程を一層複雑にしていることである。

実際、重要な議案審議を脇において、正副議長の選出問題で足を引っ張られるような事態は論外である。確かに、正副議長職のいわゆる「たらい回し」は何も青森県議会に限ったわけではなく、全国の都道府県議会でも共通して見られる現象である。重要なことは、野党が主張するように、辞任の理由を単なる「一身上の都合」ではなく、誰でもが納得できる明確な理由を提示するべきだ、と考える。

県議会議員にとって、議長職や副議長職は、当選を重ねるに従って、欲しくなるポストらしい。何故なら、正副議長への就任は選挙区の有権者たちに、地方の「名望家」としての存在を知らしめるまたとない機会であり、

しかも、それを基盤に再選を重ねることが出来るし、また多くの面で優遇されているからである。

正副議長の選出史を概観するなら、次のようにいえよう。当初は、保守勢力内での状況、ことに自民党の最高年長者とか、「有力者」の意向で決まっていた。しかしその後、議員総会での多数決で決まるようになり、やがて、選考委員会を設け、ブロックごとの意向を重視して決定されるようになった。最近では、各種の選挙における「功労」を第一条件にするようになってきているようだ。同じ当選回数の中から選出するのであるから、利害や好き嫌いの感情が入るのはやむを得ない。大事なことは「信なくば立たず」の精神である。

それはともかく、県議会の改革と民主化を進める過程では、当然、野党側の意見も聞き入れて正副議長の進退を検討し、慎重に決定して欲しい。それが、県議に対する県民の信頼回復につながっていくのではなからうか。短期間の「たらい回し」によるポスト配分の愚は避けるべきだ。

最後に、歴代正副議長に関するデータから得た、地方の名望家たちの輪郭の一部を紹介しておきたい。

戦後、46人の議長への就任平均年齢は62歳であり、当選回数は平均5回を数え、また平均得票数は9,985票である。選挙区別では、三大都市である青森市（5人）、八戸市（5人）、および弘前市（4人）の出身者に集中しており、学歴別では、大学卒が15人（33%）と最も多かった。

一方、45人の副議長就任の平均年齢は59歳であって、当選回数は平均3回を数え、平均得票数は10,114票である。選挙区別では、青森市（8人）、八戸市（9人）選出者に集中しており、また学歴では、大学卒が15人（34%）と最も多くを占めた。

〈参考資料〉については、秋に公刊される『戦後青森県の県会議員選挙と歴代議長』（北方新社）の方を参照されたい。